

三木市埋蔵文化財調査概報

—昭和50年度～昭和59年度—



1986・3

三木市教育委員会

はじめに

昭和50年度より10年間にわたり、三木市教育委員会社会教育課がおこなった、埋蔵文化財の調査が概報として、このたび発行されたことは、まことに喜ばしいことであり、その掌に当たった方のご労苦に対し、深く敬意を表するものであります。

今日、三木市が発展開発されていくことは大変嬉しいことであります。一方、開発によって埋蔵されていた、古代の遺跡、遺物が発見出土されますが、それを科学的に調査し、記録しておくことは、学術的に、また後世にとっても意義あることと考えます。

三木市は、「みなぎのこおり」と呼ばれ、志染に屯倉が置かれていたことなどが古事記、日本書記、風土記に記されています。古代から「たかの里」「ひらのの里」「えかわの里」が広がり開かれており、その中央を「みながれいたくうるわし」と言われた清流が田畠を潤していました。そこに、私たちの遠い祖先が生活を営み、どれほどの人が生まれ死んでいったことでしょう。静かに瞼を閉じて往時をしのぶ時、かれらの姿が彷彿と浮かび懐旧の念ひとしおのものがあります。以来、星移り時変わってここに幾星霜、その間の人々の住居、生活用具、城跡、墓地等の数々が発掘されます。それをここに正確にとどめて次代に伝承することは現代の私たちの義務とも言えましょう。消え失われゆくものを記録に残すことにより、先人の生きざまや労苦を知り、今後のわが郷土三木市発展のために、鋭意努力されるよう心より念じて、はじめの言葉といたします。

1986年3月

三木市教育長 川崎正雄

(三木市埋蔵文化財調査概報巻頭言)

例　　言

1. 本書は、三木市教育委員会が、昭和50年度から昭和59年度までの10年間において、市内で実施した埋蔵文化財調査の略報である。
2. 本書は、市内で実施した埋蔵文化財調査の状況を知るためのものであり、調査の詳細にわたっていない。
3. 本書は、三木市教育委員会が作成した各年度の社会教育活動状況報告書で、報告した調査概要から抜粋し、再構成をおこなうとともに、未報告の調査記録を追加して編集をおこなった。
4. 本書に使用している、調査位置図は、5万分の1の地図で上辺が北である。
5. 本書の構成、編集は、三木市教育委員会社会教育課がおこなった。
6. 各調査の実施にあたっては、三木市・兵庫県教育委員会・三木土地改良事務所等、関係各方面から多大なご協力とご指導を頂いた。ここに厚く感謝の意を表したい。
また、調査作業にご協力頂いた作業員の方々にも、深くお礼申し上げたい。

目 次

1.	開発行為にともなう分布調査	1
2.	(仮称)細川ゴルフ場内A遺跡確認調査	2
3.	細川中遺跡確認調査	4
4.	吉田遺跡確認調査	6
5.	細川中南遺跡確認調査	7
6.	吉田南遺跡確認調査	8
7.	宿原5号窯址発掘調査	9
8.	戸田遺跡確認調査	37
9.	平井遺跡確認調査	49
10.	戸田西遺跡確認調査	53
11.	三木城址発掘調査	54
12.	吉田群集墳第2群 1・2号墳発掘調査	59
13.	高男寺庵寺遺跡確認調査	61
14.	三木城鷲ノ尾遺跡(第1次調査)発掘調査	65
15.	三木城鷲ノ尾遺跡(第2次調査)発掘調査	68
16.	東吉田遺跡確認調査	70
17.	三木山古墳1号墳発掘調査	77
18.	高男寺本丸遺跡確認調査	83
19.	久留美下川原遺跡確認調査	91
20.	市道緑ガ丘幹線道路整備事業・高男寺川河川改良工事に伴なう確認調査	95
21.	細目有田遺跡他確認調査	97
22.	跡部古窯3号窯発掘調査	106
23.	巴古墳群1号墳発掘調査(旧名称、土山街道群集墳第1群第5号墳)	109

表 紙

戸田遺跡出土の複合口縁壺(弥生時代)

口縁部径31cm、頸部径36cm、頸部径24cm、胴部径59cm、推定高74cmを測る大型の壺である。

胎土からこの地のものではなく、搬入品で山陽系か山陰系と考えているが明らかでない。

1. 開発行為に伴う分布調査

50年度は、ゴルフ場の開発申請があいつぎ、市教育委員会社会教育課として分布調査を実施したのは4ヶ所、総面積3,735.628m²延べ人数277人にのぼった。調査結果は、三木泉ゴルフ場・大谷ゴルフ場・川重休暇村においては埋蔵文化財は地域内においては発見されなかったが、細川ゴルフ場においては遺物散布地を1箇所確認した。

開発に伴う埋蔵文化財分布調査以外について市内加佐において窯跡を発見したのを始めとして、数ヶ所の遺跡を発見、確認した。

表1. 開発行為に伴う埋蔵文化財調査

名 称	所 在 地	面 積 m ²	調査日数	延べ人數	備 考
1 三木泉ゴルフ場	口吉川町大島・楓	1,472.062	21	94	分布調査
2 大谷ゴルフ場	志染町大谷	911.340	8	22	"
3 細川ゴルフ場	細川町金屋・豊地	789.926	40	146	"
4 川重休暇村	細川町瑞穂	562.300	6	15	"



第1図 調査位置図

2. (仮称)細川ゴルフ場内A遺跡確認調査

1. 所在地 三木市細川町豊地字西山

2. 調査員 三木市教育委員会 増田進司

3. 期間 昭和52年2月22日～昭和52年3月4日

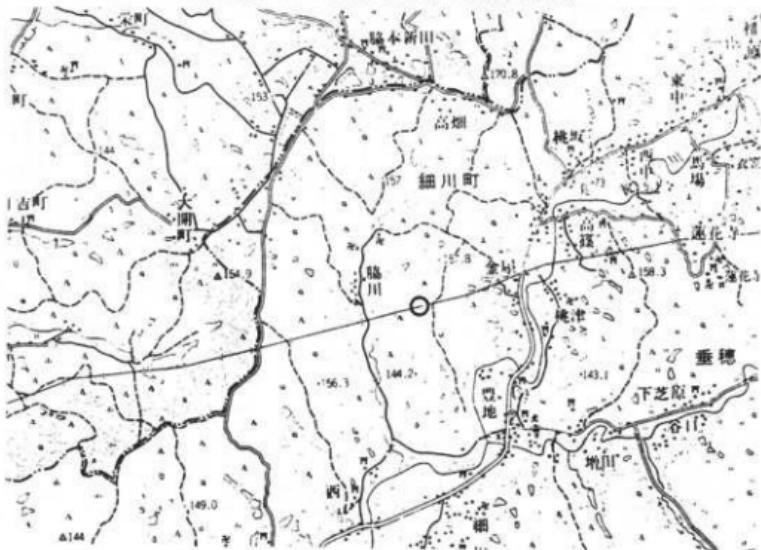
4. 調査に至る経過

ゴルフ場開発申請に基づき、昭和50年度に分布調査を実施したところ、須恵器片等の遺物が多数散布していたため、細川ゴルフ場内A遺跡と称し、埋蔵文化財確認調査を実施することになった。

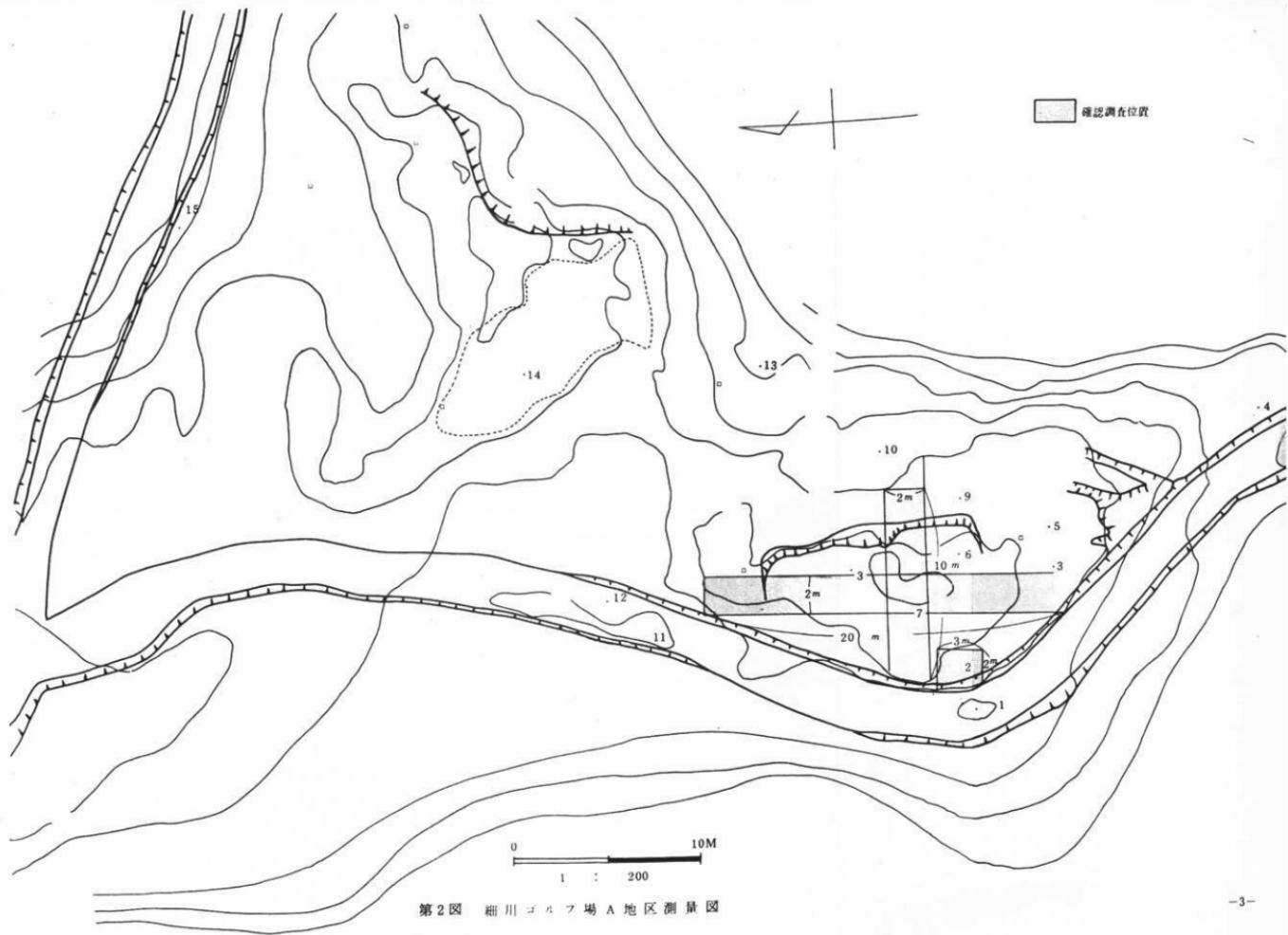
5. 調査概要

2m×3mのグリッド及び2m×10mのトレンチと2m×20mのトレンチが直交するように調査区を設定し、発掘をおこなった。(図2)

分布調査から窯跡の存在を予想していたため、窯体もしくは灰原を確認すべく調査を始めた。しかし、焼土と若干の土器片、それに窯壁片を確認した程度で、灰原や窯体の遺存を認められなかった。結局、過去において破壊されたものと考えられる。



第1図 調査位置図



第2図 細川ゴルフ場A地区測量図

3. 細川中遺跡確認調査

1. 所在地

三木市細川町細川中161番地他

2. 調査員

三木市教育委員会 増田進司

3. 期間

昭和52年1月20日～昭和52年2月5日



第1図 調査位置図

4. 調査に至る経過

当該地は、細川中農業基盤整備事業（ほ場整備）によって開発されることになったため、分布調査をした結果、多数の須恵器片を採集したので、埋蔵文化財の有無・範囲を確認するために発掘調査を行う。

5. 調査概要

(1) 調査方法

グリッド1・2・トレンチ1・2・3・4・5を設定し、埋蔵文化財の有無・範囲の確認を行なった。（第2図）

地層は、表面から順番に、10～15cmの耕作土・5～10cmの床土・15～20cmの遺物包含層（黄暗褐色砂層）その下に黄白色砂まじりの粘土層があった。

(2) 遺構

トレンチ1・2・3・4から多数のビットを検出した。確認調査のため検出したビットを数ヶ所排土したところ底から根石が検出され、掘っ建て柱の穴址と判断した。他のビットについても同様と考えられるが、発掘調査範囲が少ないので建物の規模・性格等は不明である。

(3) 遺物

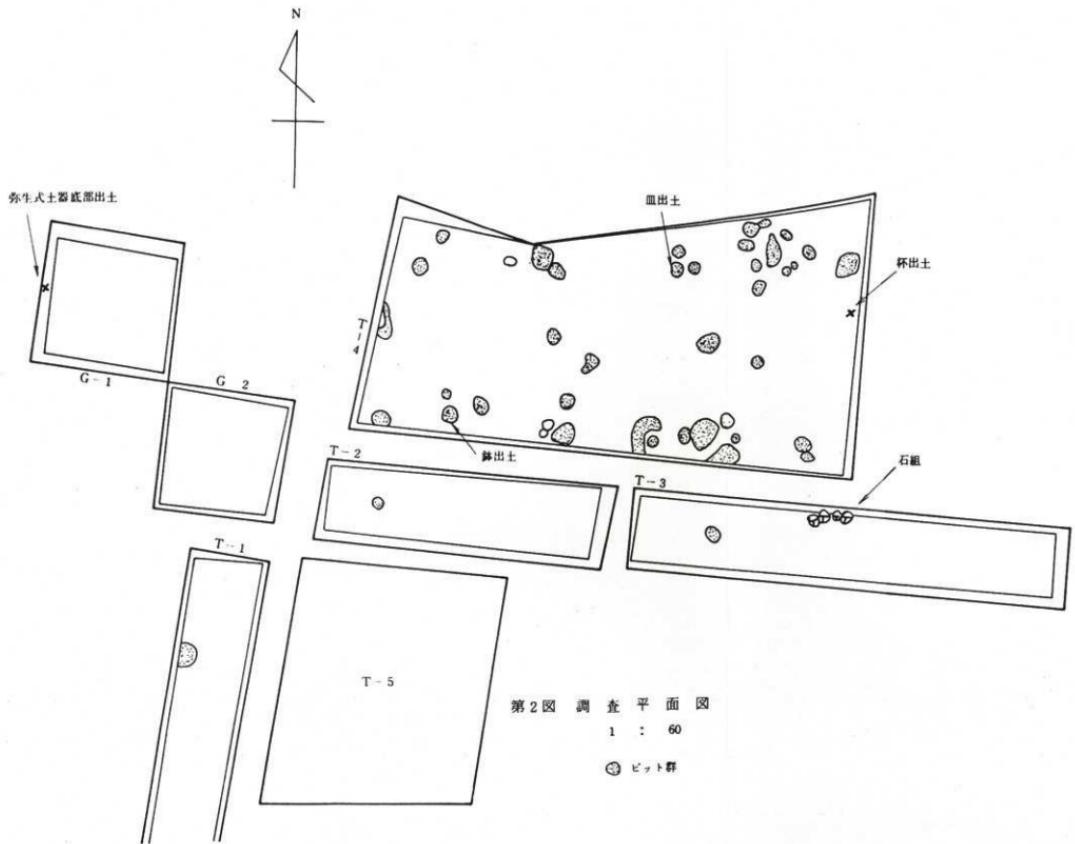
包含層から、須恵器・土師器・瓦等が多数出土するとともに、遺構面に密着し鉢・壺・杯・皿等の完形に近い遺物が、出土した。特に、鉢・壺がビット内から検出された。

出土した多数の土器片は8世紀から9世紀の物と考えられ、かなりの長期間の生活をうかがわせる。ビット内から採集された鉢は、奈良時代（8世紀）と考えられる。

他に、弥生時代末期（3世紀）の弥生式土器がグリッド1から検出された。

(4) まとめ

本遺跡の所在する細川中地域は、現在においても、条理制がはっきり認められるうえに、今回の発掘確認調査により三木市内で、はじめてという奈良時代の貴重な遺跡が確認された。三木市の歴史を明らかにするにあたって、非常に重要である。本遺跡の取り扱いについては、現状（埋蔵）保存の処置をとった。



4. 吉田遺跡確認調査

1. 所在地

三木市志染町吉田字中ノ坪他

2. 調査員

県教育委員会 井守徳男

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和52年10月14日～昭和52年12月3日

第1図 調査位置図



4. 調査に至る経過

当該地において、農業基盤整備事業（は場整備）が実施されるに伴ない、分布調査を実施した結果、須恵器片等の遺物が多数散布しているため、埋蔵文化財の有無・範囲等を確認すべく発掘調査を実施した。

5. 調査概要

当初 179箇所のグリッドを設定し進める予定であったが、工期、調査状況から 124箇所のグリッドを発掘した。

各グリッドの基本土層は、耕土・床土・黄褐色土（遺物包含層）、そして砂礫層と粘土層とに分けることができる。

調査は、工期の都合により工事計画に合わせて実施したため、発掘の深さは工事掘削の高さにとどめざるを得なかった。そのため、二次堆積による層よりの遺物の出土はあるが、遺構を認めるまでにはいたらなかった。

5. 細川中南遺跡確認調査

1. 所在地

三木市細川町細川中字今田 589番地外

2. 調査員

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和53年11月10日～昭和53年11月31日

4. 調査に至る経過

当該地において、農業基盤整備事業（は場整備）がおこなわれるにあたり、分布調査を実施し、遺物の散布をみとめた。また、昨年には当該地の北に存在する細川中遺跡で、奈良時代の遺構を確認している。そのため、当事業に先だって埋蔵文化財の有無等を確認する調査が必要となった。

5. 調査概要

分布調査の結果から、事業地内に23箇所のグリッドを設けて調査しましたが、工期等の都合により、工事掘削の高さまで発掘するという調査状況であった。

よって、二次堆積層の掘込程度に終り、下層へ至っていないため遺構の存在有無を確認しえなかった。



第1図 調査位置図

6. 吉田南遺跡確認調査

1. 所在地

三木市志染町吉田字池ノ尻 778番地外

2 調査員

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和53年12月1日～昭和53年12月25日



第1図 調査位置図

4. 調査に至る経過

農業基盤整備事業（は場整備）が昨年に引き続いて、当該地で実施されることになったため、分布調査をおこない須恵器片等の遺物が散布しているのを認めたので、埋蔵文化財の有無、範囲等を確認する調査をおこなった。

5. 調査概要

分布調査結果から53箇所のグリッドを設定し、発掘したところ、弥生時代後期の溝状遺構と、古墳時代の住居跡を検出、又、弥生時代後期の完形に近い壺をはじめ、高杯の脚部など多数の遺物が出土しました。

なお、遺構を確認した場所は、土盛によって保存しています。



第2図 弥生壺出土状況



第3図 弥生壺出土状況

7. 宿原5号窯址発掘調査

1. 所在地 三木市志染町吉田字西向1013番地外

2. 調査員 三木市教育委員会 毛利哲夫・県立三木高校教諭 綱川和明

3. 期間 昭和54年4月28日～昭和54年5月19日

4. 遺跡の位置と三木市の古窯址

三木市は、加古川の支流である志染川と美の川の合流する地点を中心に発達した城下町である。

宿原5号窯址は、合流地点から志染川に沿って約2kmさかのぼった、三木市志染町吉田字西向の集落南の丘陵開析谷に築かれている。

この丘陵は、明石～加古川～三木市にかけて広がる明美丘陵の北端部にあたり、志染川にそそぐ小河川によって、大小の開析谷が入り組んでいる。

宿原5号窯址の存在する谷は、現在ほとんど水田化しており、谷とはわかりにくいが、窯址は、谷の入口に近い西斜面に築かれしており、谷はこの付近で2つに分かれしており、釜池内に半島状の尾根が残っている。

この谷の西側の谷の皿池周囲にも宿原1～3号窯址が発見されており、宿原5号窯址と、同時期、一群のものと考えられる。

この他、三木市には、平安末期から鎌倉初期にかけての雜器窯が多く発見されており、跡部、久留美、平井、与呂木に窯址群が発見されている。これらの窯址では、糸切り底を持つ碗を主体に小皿・甕・壺・瓦などを焼成しており、特に瓦は京都の六勝寺などの建立に際し、搬出されていたことが明らか



第1図 調査位置図

になりつつあり、院政政権との関係が注目されている。

5. 調査の動機と経過

(1) 調査の動機

昭和54年3月20日、三木市が吉田は場整備事業工事中、釜池堰堤際で暗渠埋設のため約1.5mの深さに掘込んだ断面全体で黒灰色土（灰原）にまじって大量の瓦片、土器片を採集したため、工事を中止して、確認調査を実施することになった。

確認調査は昭和54年4月29日より兵庫県教育委員会の指導をうけて開始した。

なお、同窯址は同市吉田一帯の窯址の関係から「宿原5号窯址」と命名した。

(2) 調査の経過

4月28日

三木市教育委員会にて調査の打合わせと、現地の視察を行なう。その結果、平安時代末～鎌倉時代初期の瓦陶兼業の雑器窯で2基程存在するものと思われた。

4月29日～5月1日

器材搬入の後、暗渠排水埋設のため掘り掲げられた灰原中の遺物採集を行なう。

第1トレンチ設定、掘込開始

5月2日

暗渠排水埋設溝南壁断面清浄・撮影・実測・遺物採集続行・積み上げてある耕土を重機にて移動。

5月3日

G4.5.6設定、掘込開始。T1～2～5設定掘込開始。遺物採集終了。灰原は1基と断定し、宿原5号窯址と命名。

5月4日

G4.5.6で石垣列検出。現状測量図作成開始。

5月7日～13日

灰原上部の状況より窯本体は破壊されている模様。灰原上面までは、表土下1.5m以上ある。灰原全域を扯張し、上部層を重機にて移動。

5月14日～17日

灰原範囲の追求。泥砂と湧水のため調査難航。範囲実測の後、灰原の掘り込み開始。

5月18日

灰原掘込続行。第2トレンチの設定及び掘込。土層図作成開始。

5月19日

灰原掘込完了。土層図作成完了。器材引きあげ。本日にて現地調査終了。

6. 調査概要

(1) 確認トレンチの状況

① 暗渠排水埋設溝(図1)

L字型に掘られた堀設溝に2か所の灰原らしき層が露出していたが、断面清浄の結果釜池堤防下南壁のものは、溝掘削時の擾乱土であり、西端で地山、中・東部では堤の築成土及び植物遺体を多く含む谷埋積層となり灰原ではないことを確認した。しかし、谷埋積層に多量の遺物を含み、釜池堤防下、あるいは釜池内に窯址が存在する可能性が高いことが確かめられた。

また、L字型の西壁北端に露出していたものは、多量の遺物・灰・炭・焼土を含み、灰原を確認した。(5号窯址)

(2) 第1トレーニング及びサブトレーニング

工事区域内に残存する窯址数を確認するために西斜面の田に南北約37mの第1トレーニングを設定した。

その結果、トレーニング南端部で、暗渠排水埋設溝に露出していた灰原(5号窯址)を幅4.7m確認し、北限を確認した。その北は、旧斜面の凸部の地山が約12m続き、さらに耕作地にするための整地層がみられる。なお、北端部で焼土・窯壁片の若干の集積をみたが、1-2トレーニングの結果灰原とは断定し得なかった。1-2トレーニングは耕土、床土下は、厚さ20cm~50cmの整地層となり、少量の遺物片・焼土・窯壁片を含み、拳大の礫を多量に含んでいる。その下は、厚さ4~6cmの旧表土層が西から東へ傾斜をもって流れ、その下は、黄白色の地山層となる。

(3) 第2トレーニング(図1)

第1トレーニングを設定した田より約1.5m下の田に南北12mのトレーニングを設定した。耕土・床土下は、谷埋積の砂質土に遺物を含む層、その下は同じく谷埋積に遺物を含まない層となる。またトレーニング北端部では、斜面凸部の地山を検出したが、灰原は検出しなかった。

(2) 宿原5号窯址の調査

窯形成以前は、小開拓谷をなしており、現釜池内で二つに分かれる。谷底部は岩礫・砂腐泥土が堆積し、多量の植物遺体を含んでいる。窯は、その谷の西斜面に位置し、灰原は、斜面から谷埋積層にかけて形成されており、灰原下部は、旧谷川に流れ込んでいたものと考えられる。

灰原形成以後は、厚さ約40cmの砂質土・粘質土の自然堆積がみられ、その上に、少なくとも3回の整地が行なわれており、その際、灰原の上部、および窯本体は破壊されており、整地層に多量の焼土・窯壁片・遺物を含んでいる。

また、2回目の整地以後に、その整地層を約50~60cm切り込んで東西方向に石垣を組んでいる。さらに石垣は一度に埋め立てられており、埋土は、遺物等をほとんど含まず、角礫を多く含んでいる。この石垣の性格は不明である。また、灰原の下方限界が石列とほぼ並行しており、石列が築かれた時に切り込まれた可能性が強い。

灰原は、上方及び下方が削平されているため正確な規模は不明であるが、現存長約10m最大幅約10mを測り、主軸を南南西~北北東にとるが、これは現存する谷斜面とは直角ではなく、旧谷斜面の起伏に起因する。灰原は下方に向ってしだいに薄くなっているが、中

央部の最大厚50cmを測る。

灰層は、遺物の多少。破片の大小などによって、いくつかに分層できるが、各層による本質的な相異はみられなかった。

(3) 出土遺物

出土器種は、碗、小皿、片口鉢を主体に、壺、羽釜、それに瓦を焼成している。

ア 須恵器類

① 碗(第2・3図)

回転糸切りされた平底と、外上方へゆるく内湾しながら開く体部を持つ。口径16cm、高さ4.6~4.8cmの規格品が一種のみである。口縁部はやや肥厚し、端部を丸くおさめているものが多いが、内側へ丸く突出させたものもみられる。内外面ともロクロナデ調整されているが、内面底には、指1~2本による乱方向のナデがみられる。胎土は全体によい。

② 小皿(第4図)

口径8~9cm、高さ1.5cm前後の小皿である。軽く斜め上方につまみあげた体部と回転糸切りされた底部を持つ。片口は持たない。

③ 片口鉢(第5図)

図示したものは、口径19.0cm、高さ13~14cmのものである。回転糸切りされた平底に、ほぼ直線的に開く体部を持ち、口縁部は肥厚せず、斜め内側に外面が屈曲し、端部は丸くおさめる。外面はロクロナデ調整されているが内面はナデにより調整されている。

④ 壺(第6・7図)

大小各種あるが、いずれも大きく外反する口縁内側に浅い凹みを有するのを特徴とする、外面はいずれも横方向の比較的細かい平行叩きを施している。内側は、ハケの後ナデによって仕上げている。口縁部~頸部の内外面はロクロナデ調整されている。

⑤ 羽釜(第8図)

口縁上部は、水平もしくは内傾し、斜上方を向くツバを付けている。内外面ともハケによる調整を行なっている。

⑥ 底部(第8図)

壺類の底部と思われる。断面台形の貼り付け高台を持つ。底面は回転糸切りされている。

⑦ 土鍤(第8図)

土鍤は失敗品が少ないため一点のみの出土である。棒状のものに粘土をまきつけて成形しており、両端部はヘラケズリされている。穴の径2.6cm、長さ9.6cmを測る。

⑧ 特殊な碗(第9図)

外面の体部、底面にヘラ書き文をもつ。断面三角形の貼り付け高台を持つなど、当地方の通常の碗とは異なっており、畿内の瓦器碗の成形技法をまねてつくっている。

体部は軽く内湾しながら開き、口縁部で肥厚し、端部はやや平坦に仕上げている。内外面ともロクロナデ調整されているが、内面底には乱方向のナデがみられる。口径

17.6cm、高さ5.1cmを測る。ヘラ描き文は2つのモチーフによるが、何を表現したものかは現在のところ明確にしがたい。

イ 瓦

① 軒丸瓦(第10図)

瓦当文様としては2種類出土した。1は擬複弁八葉華文系の文様をもつもので雜蕊が子房周囲に付くものである。2および3は左廻りの三巴文である。2は外区に推定24~26個の珠文をそれぞれめぐらせてある。2は外径12.0cm、内区径7.5cmを測る。ともに灰黒色を呈し、いわゆる瓦質である。瓦当面裏側は、周囲を円周状になんでる。内側は向って右上りのナデを施している。頸部もナデ調整である。

1・2ともに丸瓦とり付け部は、瓦当面裏側に指で溝をつけ、そこに丸瓦をさし込み内側および外側に粘土を補充してナデ付けている。

② 軒平瓦(第11・12図)

1の文様はくわしくはわからないが、唐草文系のものである。

2および3は花弁を重ねた劍當文の一種である。本窯出土のものは、花弁間に下方から三角形の文様を表わしているのが特徴である。なおこの2つは同范である。

4は唐草文のくずれたもので、奈良時代軒平瓦の意匠をデフォルメしたものである。

5は均正唐草文を祖型もしくは原型とするものである。

瓦当と平瓦の接合も瓦当裏側に指で溝をつけ、そこに平瓦をさし込んで粘土を補充して接合している。凹面、凸面の瓦当と平瓦の接合部はヨコナデを施している。頸下部、横部もヨコナデ調整を行なっている。

③ 丸瓦(第13~15図)

玉縁を持つものである。1・2のような粗雑なものがほとんどであるが、まれに3のような玉縁が極端にすばまり、全体に丁寧に作っているものがある。

1・2は玉縁部の凸面はヨコナデ、もしくはロクロナデを行なっており、丸瓦部凸面はタテナデを行なっている。側面および端面はヘラケズリされている。3は丁寧に製作しており、焼き上がりも他の須恵質に対し、いわゆる瓦質で、表面も黒くいぶしているようである。玉縁部および丸瓦部との接合部はロクロナデを行なっており、丸瓦部はヘラ状工具で縱方向に磨いているようである。

④ 平瓦(第16~18図)

いずれも一枚造りである。凸面はタテナデを行なう。側面および端面はヘラケズリされているものがほとんどである。なお、3の凹面には、小さな葉の圧痕のようなものがみられる。

7. まとめ

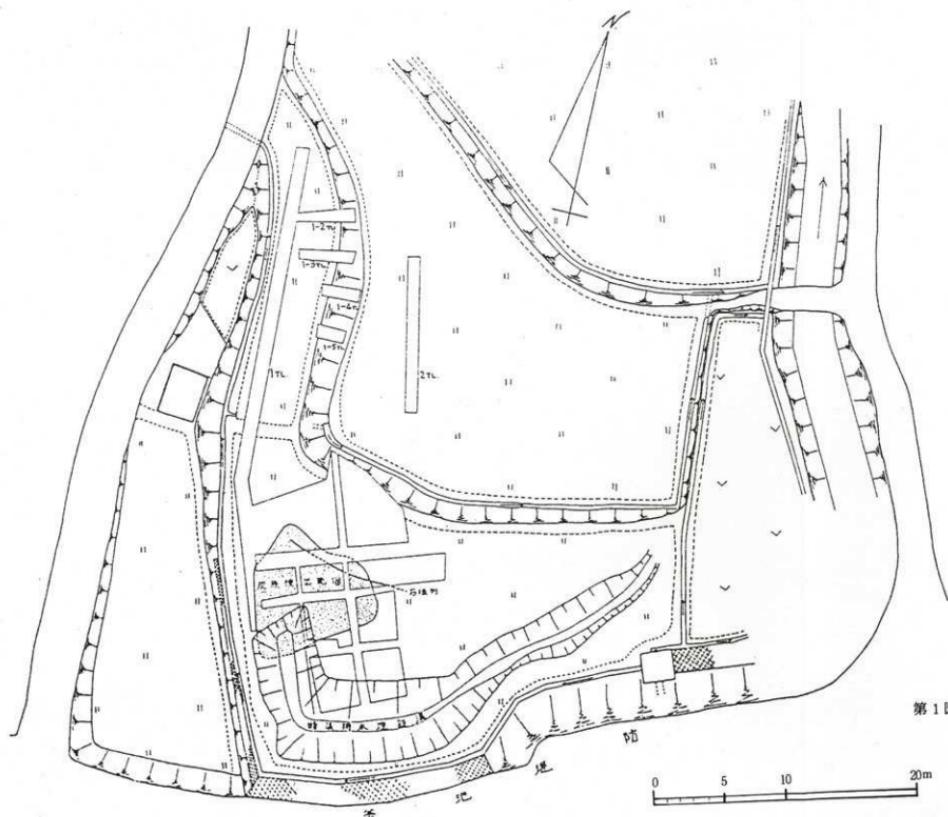
宿原5号窯址は、灰原のみが残り、窯本体は周辺耕地化する際に破壊されてしまっていた。しかし、三木市における平安末期の窯業生産のはんの一部であるが明らかになったものと考えられる。

器種構成は、碗・小皿・片口鉢を主体に甕・羽釜・土鉢など、いわゆる民間雑器を中心に生産していた一方、線刻画を有する碗など装飾を持つものも出土し、おそらく寺院関係で使用されたものと思われる。また、瓦を多量に生産しており、今後の研究に待つところが大きいが、京都の院政政権との結びつきを示す資料も出土している。

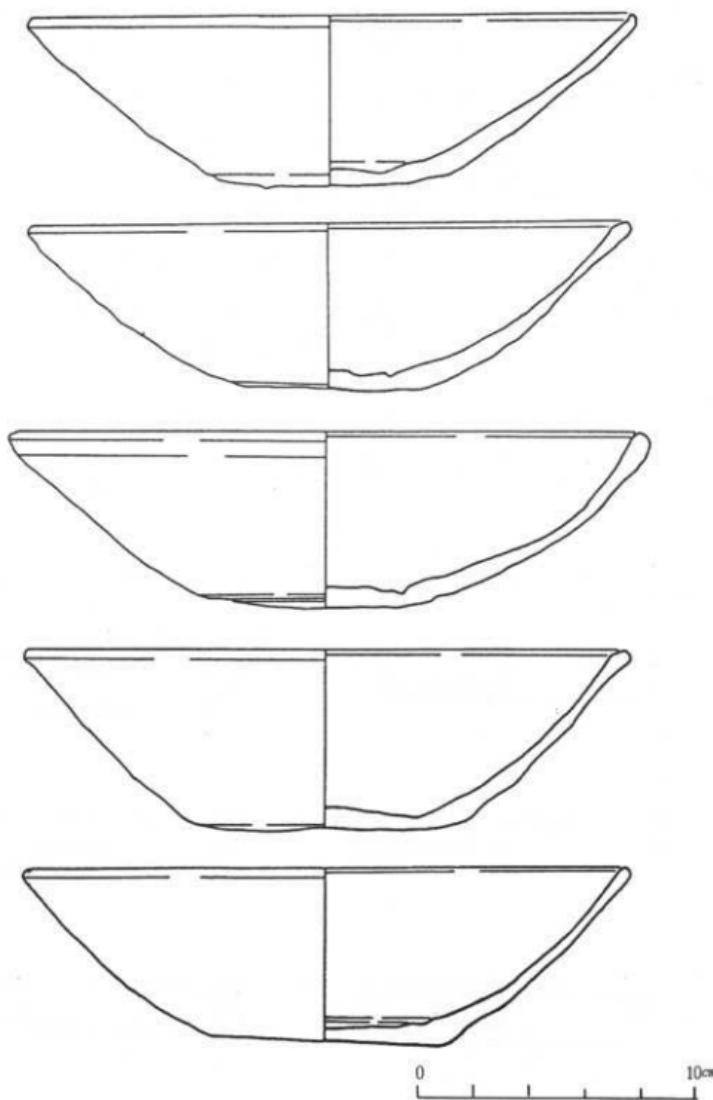
播磨における平安末期の窯業生産の研究は、まだその端についたばかりである。今後の研究、調査によって明らかにされてゆく中で宿原5号窯址を位置づけてゆくべきであろう。

*瓦の観察にあたっては、上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究』

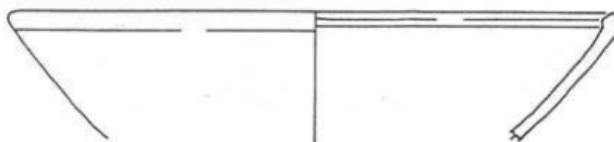
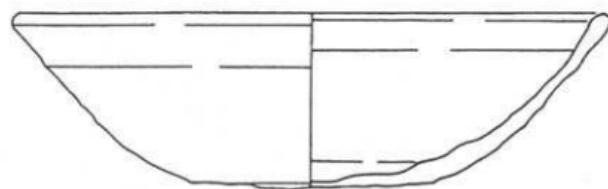
13・14合併号 元興寺文化研究所 1978 を参考にさせていただいた。



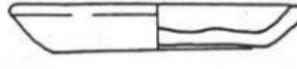
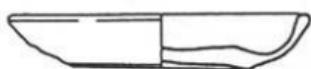
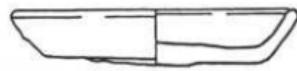
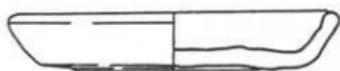
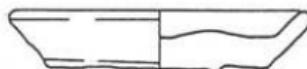
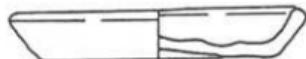
第1図 宿原5号館周辺地形測量図



第2図　碗実測図

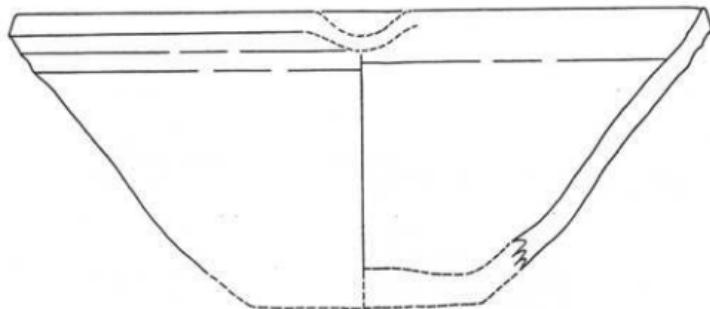


第3図 碗 実 検 図

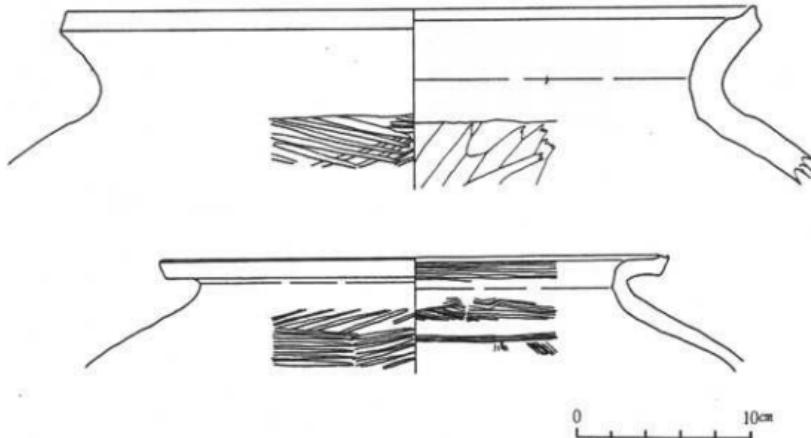


0 10cm

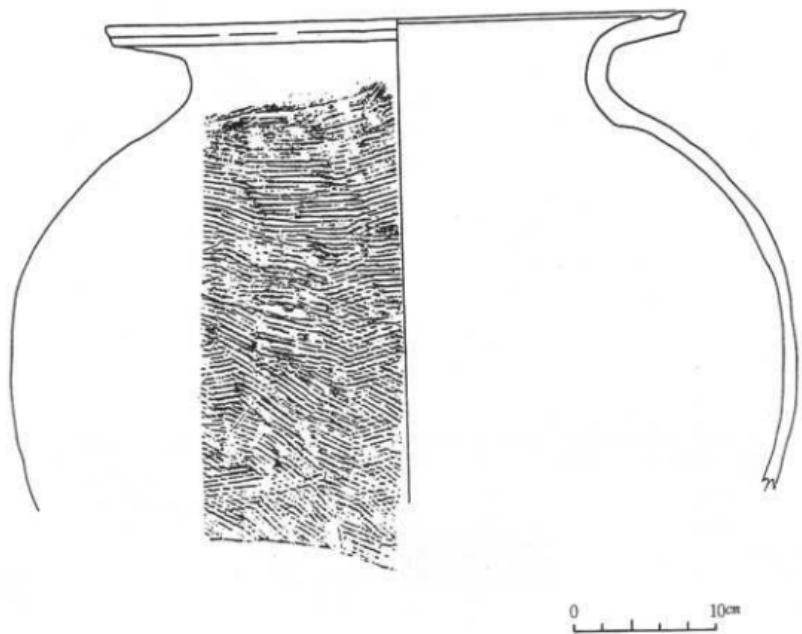
第4図 小 盆 実 検 図



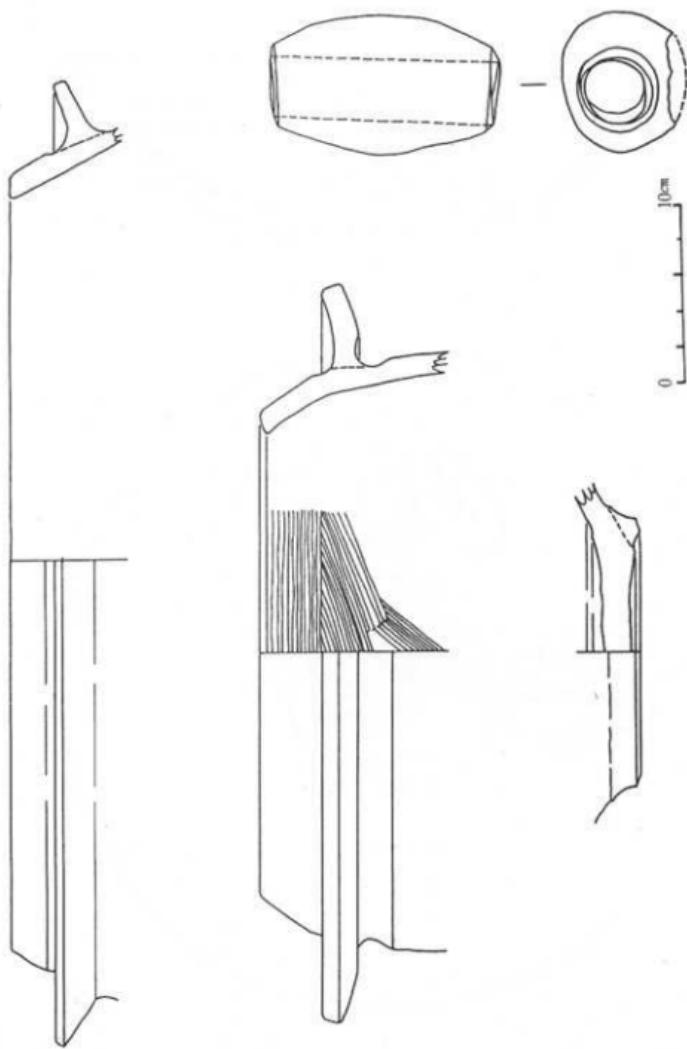
第5図 片口鉢実測図



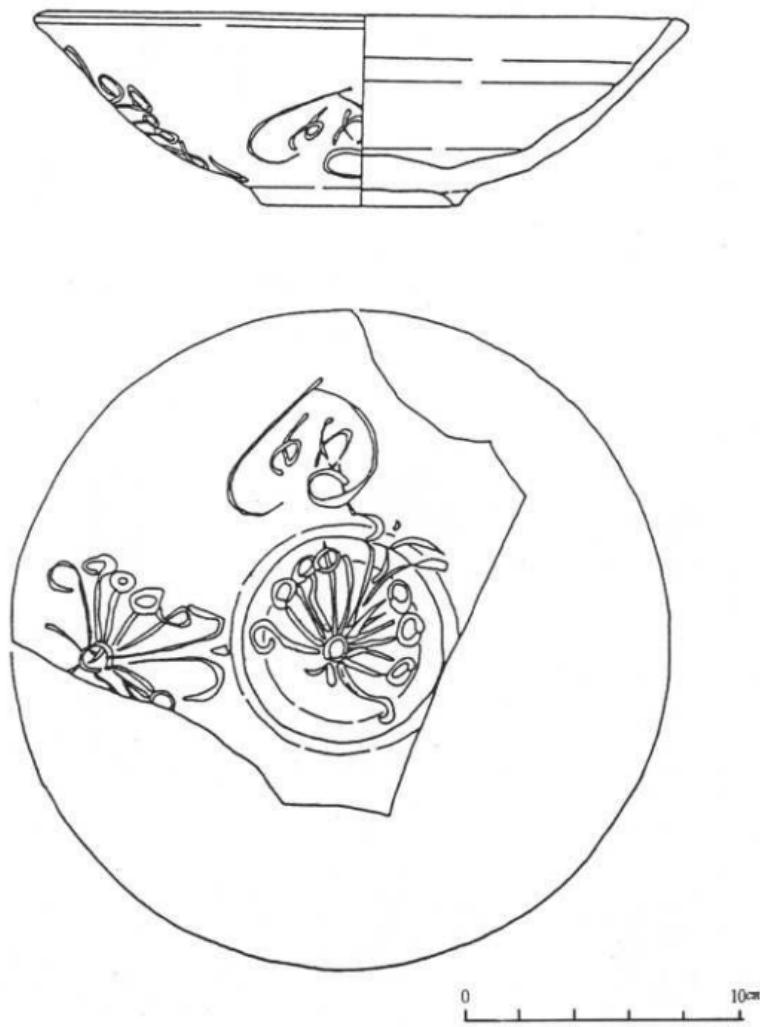
第6図 壺実測図(1)



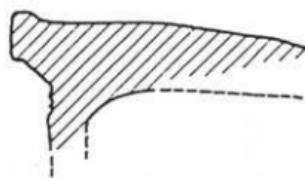
第7図 殻実測図(2)



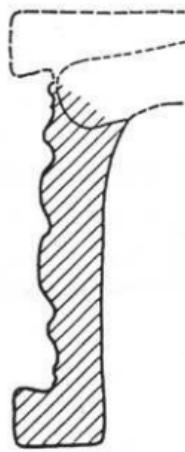
第8圖 羽金、底部、土縫実測図



第9図 特殊な碗実測図



1



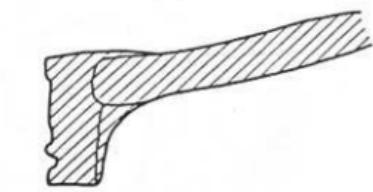
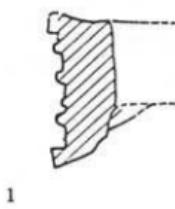
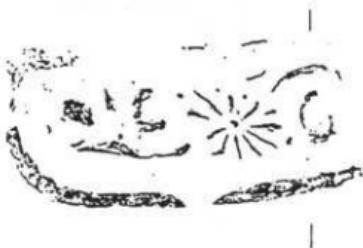
2



3



第10図 軒丸瓦実測図 (1)



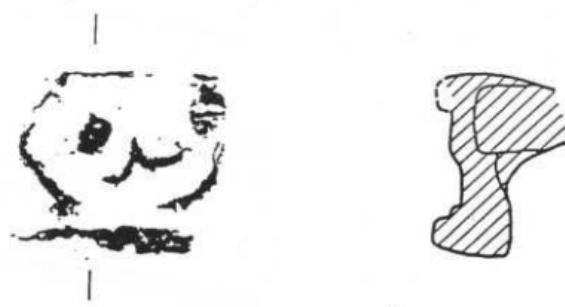
3



第11図 軒平瓦実測図 (2)



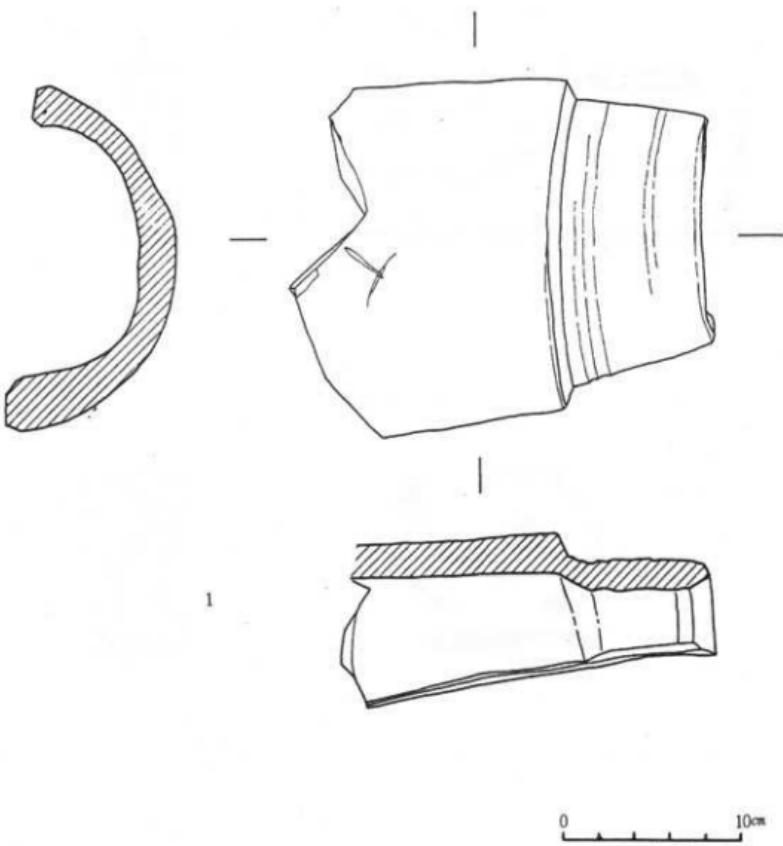
4



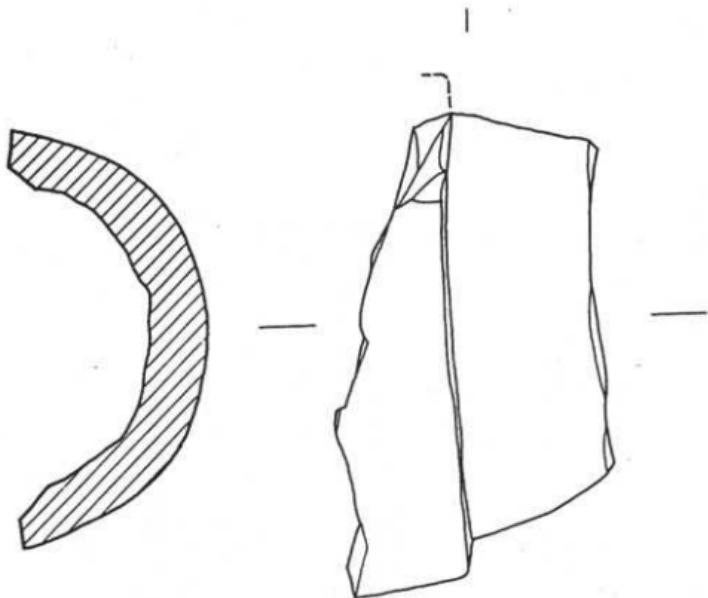
5



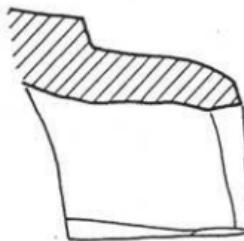
第12図 軒平瓦実測図 (3)



第13図 丸瓦実測図 (1)



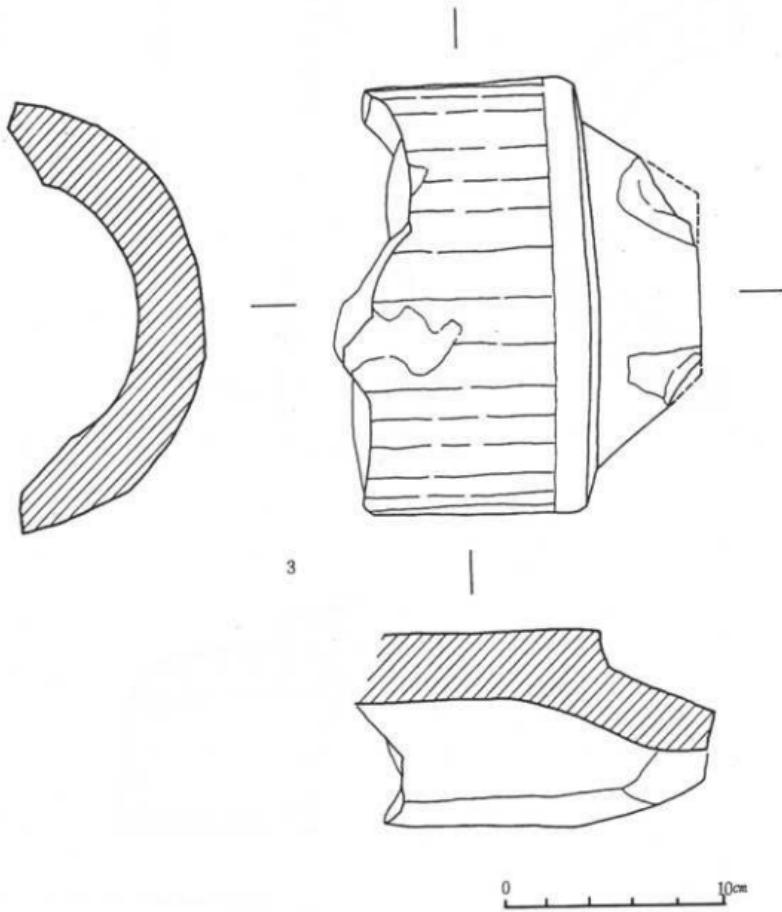
2



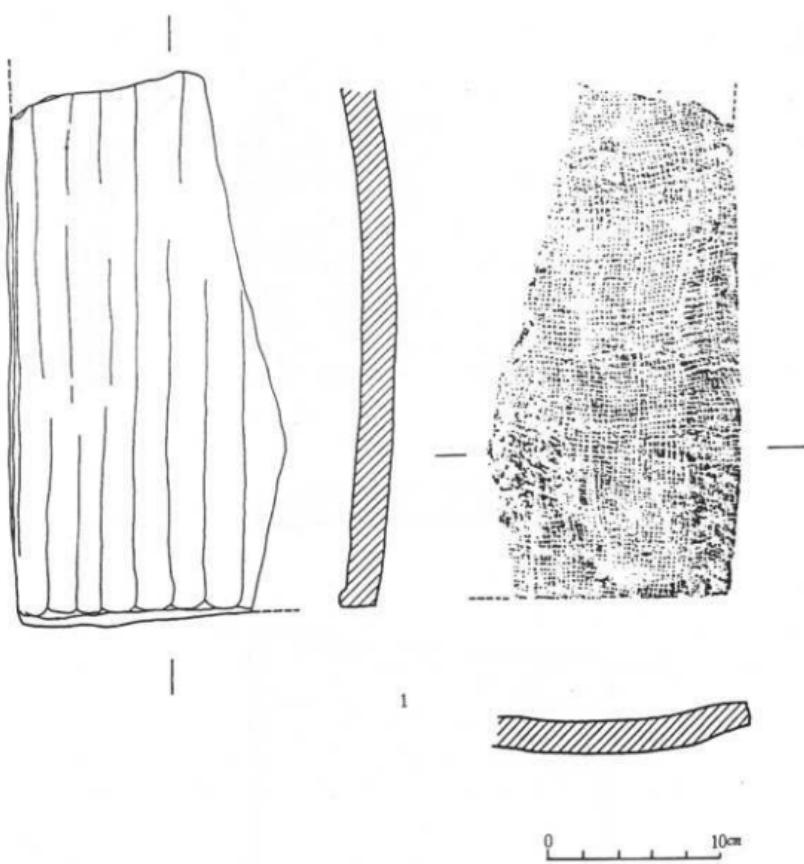
0

10cm

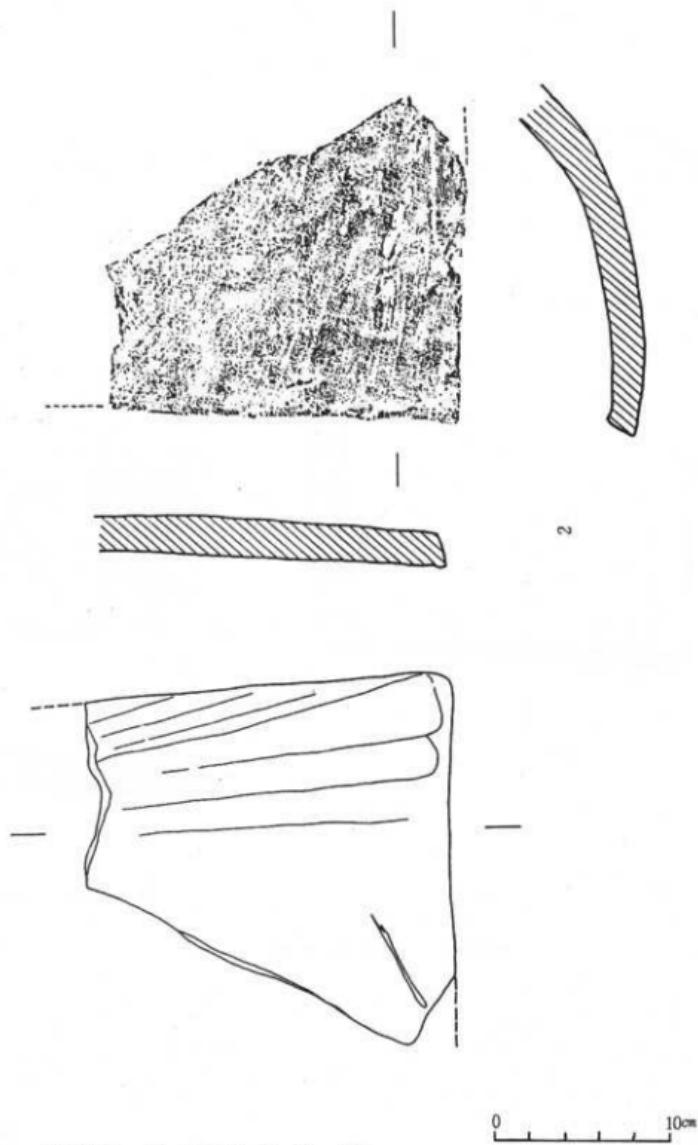
第14図 丸瓦実測図 (2)



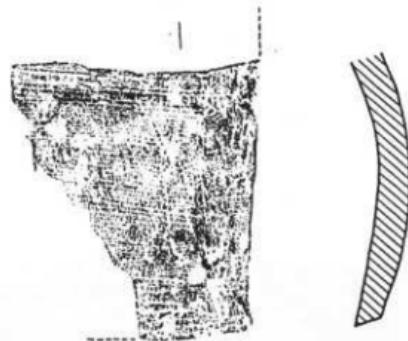
第15図 丸瓦実測図(3)



第16図 平瓦実測図(1)



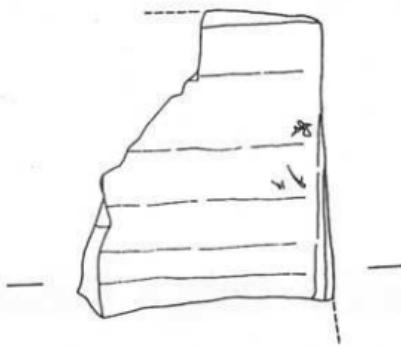
第17図 平瓦実測図 (2)



—



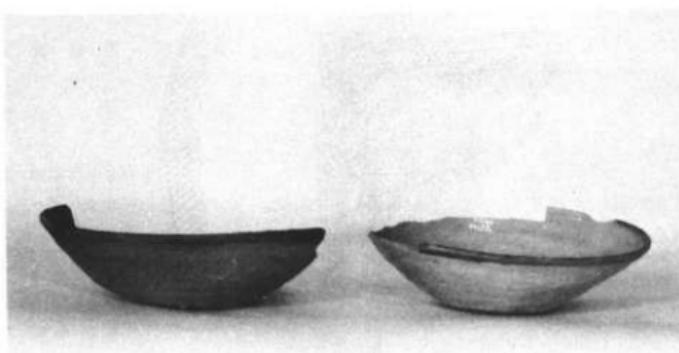
3



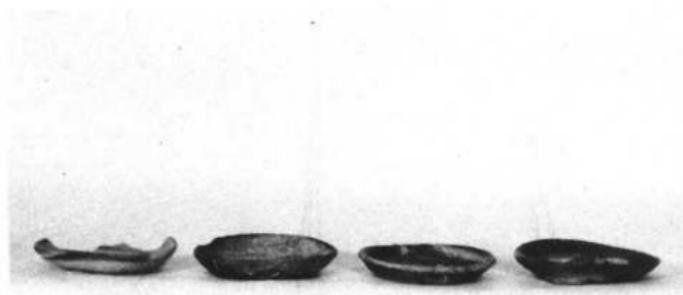
第18図 平瓦実測図 (3)

圖版 1.

碗



小 盆



図版 2.

片口鉢

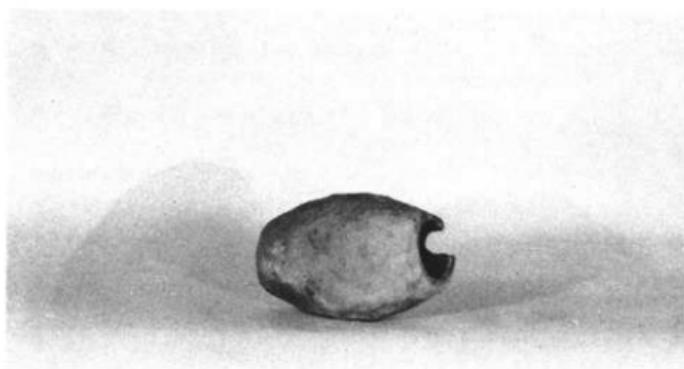


壺

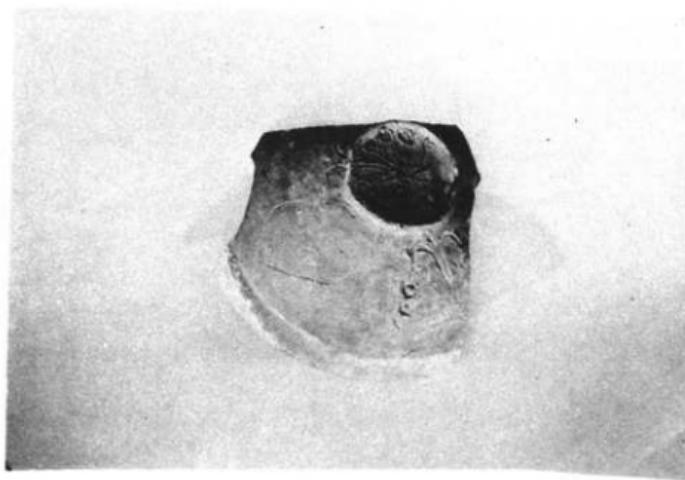


図版 3.

土 鏊



特殊な椀

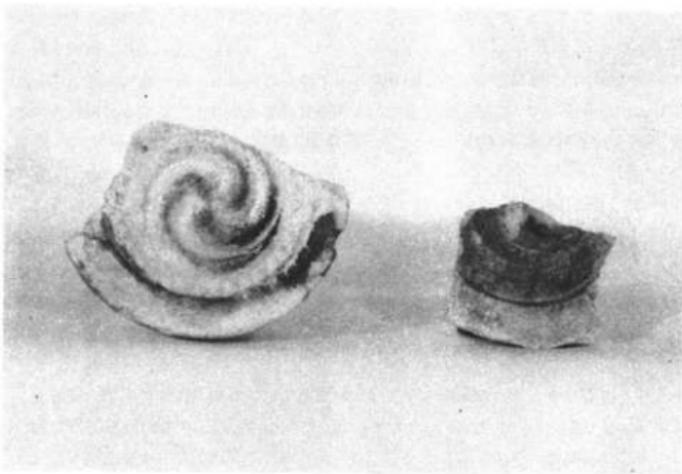


図版 4.

軒丸瓦 (1)



軒丸瓦 (2)



圖版 5.

軒 平 瓦 (1)

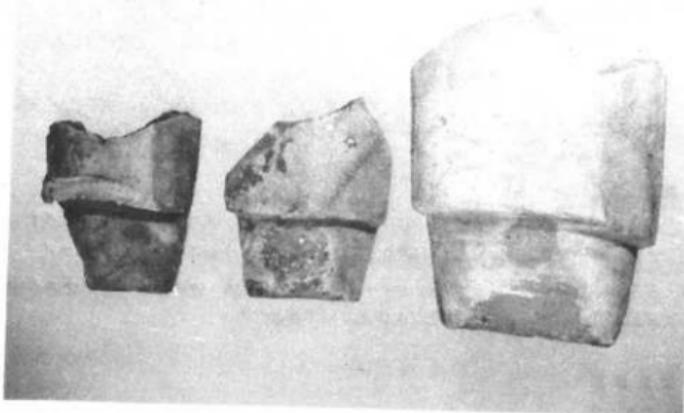


軒 平 瓦 (2)



図版 6.

九 瓦



8. 戸田遺跡確認調査

1. 所在地

三木市志染町戸田

2. 調査員

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和55年8月7日～昭和56年1月10日



第1図 調査位置図

4. 調査に至る経過

今回の調査は三木市志染町戸田のは場整備第1工区において埋蔵文化財の確認を行ったものである。今回全水田において分布調査を行い、須恵器・土師器・石器（サヌカイト）を採集したため、確認調査が必要となり8月7日より遺跡の時期・範囲及び性格の確認を目的として試掘調査を三木市教育委員会が主体となって実施した。

5. 調査概要

(1) 調査方法

主に2m×2mのグリッドを設定し、その数は約70箇所に達した。それぞれ包含層の有無時期を確認し、遺構が存在した場合は随時拡張をおこなった。Aトレンチは尾根上（サヌカイト散布地）で1m×100mを設定し、実際には約3分の2を調査した。BトレンチはG1、G2で遺構が存在したため、その性格を知るために5m×10mを設定した。Cトレンチはグリッドで柱穴が認められたので建物の規模を知るために、各方向に拡張をおこなった。各グリッドでは地山の検出を最終目的としたが達していないものもある。

(2) 遺構

① 弥生時代後期～古墳時代

県道南の河岸段丘上で幅約2m、深さ1m弱の断面U字形の溝が約30m、又同じく幅1m強、深さ0.5m弱の溝が50m以上確認されている。ほぼ一直線上に同時期の溝が2本あったことになるが、両者のつながりはまだ不明である。東方の溝は底に砂が堆積しているが中位から上位にかけては粘質の土であり、あまり水が流れた痕跡はなく、西方の溝は砂質土が堆積しており対称的である。又東方の溝は上位に10cm～30cm大の石が方向性をもってかなり投げこまれている。これは溝を完全に埋めることを目的としたであろうが、溝のそばに石が積まれていたと思われる。この溝の性格が集落をとりまくものか、農耕用の水路であるのかなどの想定に対しても、今回の調査面積では結論を下すことは不可能である。

Aトレンチを設定した台地上でサヌカイト片を採集していたので、この時期の遺構を

予想していたが、近世以降の開墾により削平されていた。さらに県道北のG1、G2の下層でこの時期の遺構（土括）を包含層と共に検出しており、この段丘上にも集落があつたと考えられる。非常に良好な状態であった。

② 奈良時代～平安時代

Bトレンチで包含層、遺構面が認められている。トレンチ北端に東西3間×南北1間以上の建物SB01の一部があり、南北軸は現在の水田の畝方向と一致している。柱間は約1.2mで底の有無などわからないが、約30箇のピットがあり建物の切り合いなどがあると考えられる。ただトレンチの南ほどピットが小さく數も少なくなっている。建物群のはんの一部にすぎないのでどのような構成であったかはわからない。

次に県道南側でSB02、東西4間×3間柱間約1.6mがCトレンチで検出された。前代の溝を最終的に埋め厚さ3cmのジヤリ層で整地している。これも底の有無は不明である。柱穴を掘りきっていないので確実な建物に伴う遺物がないので断定できないが、包含層の遺物からみて、奈良時代後半もしくは平安時代前半期と思われる。

また、G57において3.2m×3.4mの竪穴遺構が確認されている。深さは20～30cmあり地山を振りぬいている。上面から炭があり床面に殻も多い。炭は木質のものとワラ状の2種類がある。しかし、壁及び床は火をうけていない。廃絶にあたり炎焼したと考えられる。床面に密着する遺物はなかったが、埋土より土師器・須恵器・鉄器・石（30cm大）が検出された。柱穴は4ヶ所で床面は場所により粘土をはっている。この時期の竪穴遺構の検出例は近畿地方では少なく、特徴的な意味をもち、住居跡と断定することはできない。

以上より、この時代は県道をはさむ舌状台地以南の全城にひろがり、掘立柱建物と竪穴遺構からなる一大集落であることがわかった。又、遺物として綠釉土器という地方では寺院もしくは官衙にはば限定されるものが出土したことは、この集落がかなり大きな力をもっていたと考えられる。集落は東西に広がると考えられるが、地形上今回の対象地が中心部とも思われる。

③ 鎌倉時代

通称丸山の南側の丘陵上に配石墓が、現段階では3基検出されており、さらに2基が若干トレンチにかかっている。最も残りのよいG13のNo.1は南北1.5m、東西1mの配石をもち、2m×1.5mのだ円の掘り方をもつ。石の上面及び石の間に粉粹された土師器甕・須恵器片口鉢があり、これらから鎌倉時代後半のものと考えられる。深さは約20cmで中心部に藏骨器をもつかどうかは不明である。この遺構は県下でもめずらしく、全国的にもその数は少ない。他の例から考えて、集落を望む丘陵上に群集しており、この丘陵上にまだ同じような中世墓が多くあるものと考えられる。

(3) 遺 物

弥生時代後半から古墳時代を多量に含んでいた。東方の溝は基本的に上層・中層・下層の三層に分けられる。下層は青灰・色砂が主体をなし、外面タタキ、内面はヘラ削りはみとめられず、最大径が胸中位にある甕が出土しており、弥生式土器と考えられる。

中層は最も包含量が多く器種、タイプも豊富である。甕は外面にタタキだけの場合もあるが、ハケ目調整を加えている。内面はヘラ削りが脚著で器壁は薄く、胴部に竹管スタンプをもつものがあり底部はしっかりしたものが多い。まだ全体の洗浄、検討を経ていないが概して庄内式併行と考えられる。複合口縁壺はこの層の上面ないし層内から出土している。口縁部径31cm、頸部径24cmで、く字形に内傾し、端部は面をなし、外面側にきざみをめぐらす。屈曲部でもきざみをもつ。屈曲部から上位は斜格子状のヘラ磨き調整、下もタテ方向のヘラ磨き調整と共に細かくていねいである。この土器のみ。やや赤っぽい茶褐色で撒入品の可能性がある。ミニチュア土器（？）なども出土している。上層は布留併行と考えられるが量は少なく中層のものも混っており、又若干須恵器が混入しているが整地のものであろう。層は明確であり、一括採集を慎重に行なったが湧水のためにとりあげ時に若干混入している。緑釉土器は奈良末、平安初期の包含層から検出されており高台をもつ皿、もしくは椀のジャノメ高台の一部で歓賞の須恵器の内外面に淡い釉がかかっている。包含層の時期に合うと考えられる。この時期は須恵器杯、皿、壺などが中心に出土している。

配石墓の須恵器は市内の窯で製作され在地で使用されたものと考えられる。耕土旧耕土からも多く検出されている。以上が今までに大体知れたことですが、まだ整理中であり、特に古式土器に関しては近接地域の資料をできる限り検討せねばならず、分類編年は今後の課題としたい。

6. まとめ

戸田遺跡群は、弥生時代後半から鎌倉時代までの生活のあとがみられる複合遺跡であるが、舌状台地以北の奥谷の開発は近世以降と考えられる。弥生時代から平安時代前半期にかけては県道をさむ二段の段丘上で生活が営まれている。弥生時代後半の住居址は検出できなかったが、溝の規模から考えてかなり大規模な集落を想定してもよいと思われる。一方奥谷は市内で数少ないグライ土壤地帯である。

同時期の吉田遺跡群では丘陵上に壺棺群を形成しており、戸田においても当然その存在が予想される。市内ではまだ発生期ないし前期古墳がみとめられないが、両遺跡をみると発生期古墳を成立させる要因はあったと思われる。

奈良時代から平安時代の掘立柱建物と竪穴造構の共存、緑釉陶器片の出土などから戸田遺



第2図 複合口縁壺検出状況

跡群は極めて多彩な特徴をもつ遺跡である。

また、この遺跡には県下でも非常に数の少ない鎌倉時代の配石墓が群集状態で形成されている。

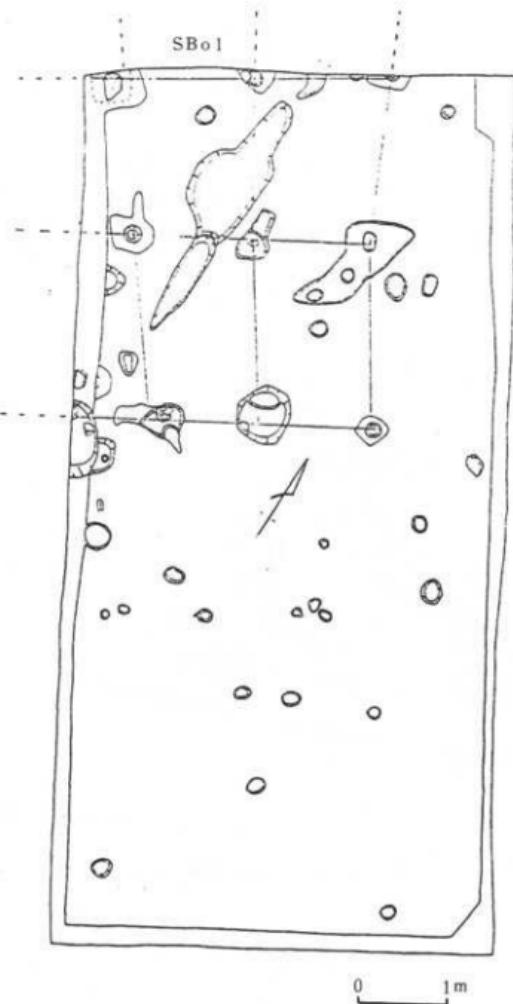
以上、いずれの遺構も市内初のものであり、最古の構を含み、質量共に吉田遺跡群と共に市内最大の遺跡群であることが今回の調査で判明した。しかし今回はは場整備事業に伴う確認調査であるため、疑問を残すところも多い。

なお、遺物は三木市教育委員会で保管している。

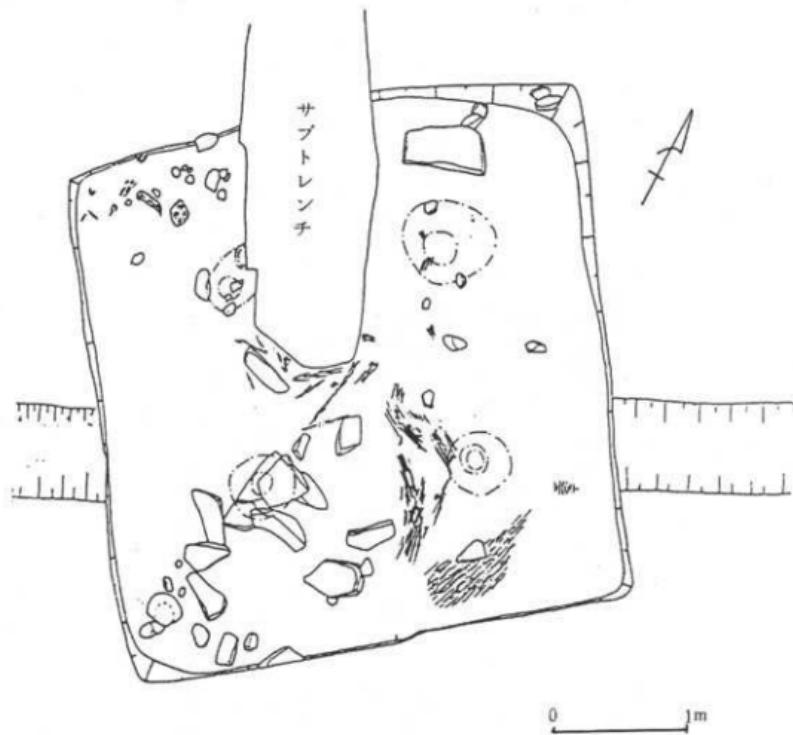
最後に、戸田遺跡群の大半は、現状保存されている。

第3図 トレンチ配置図

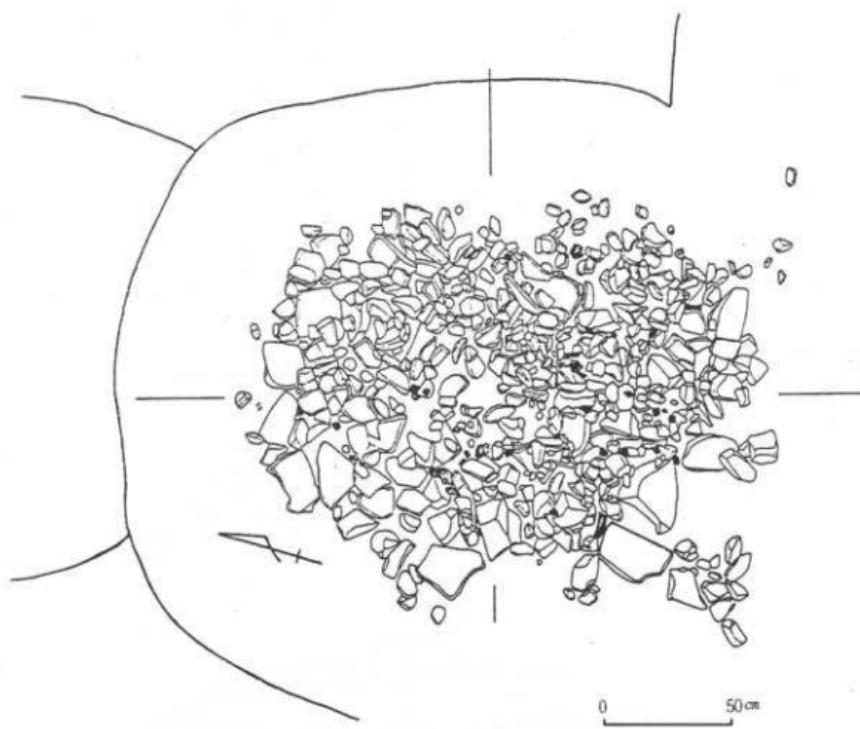




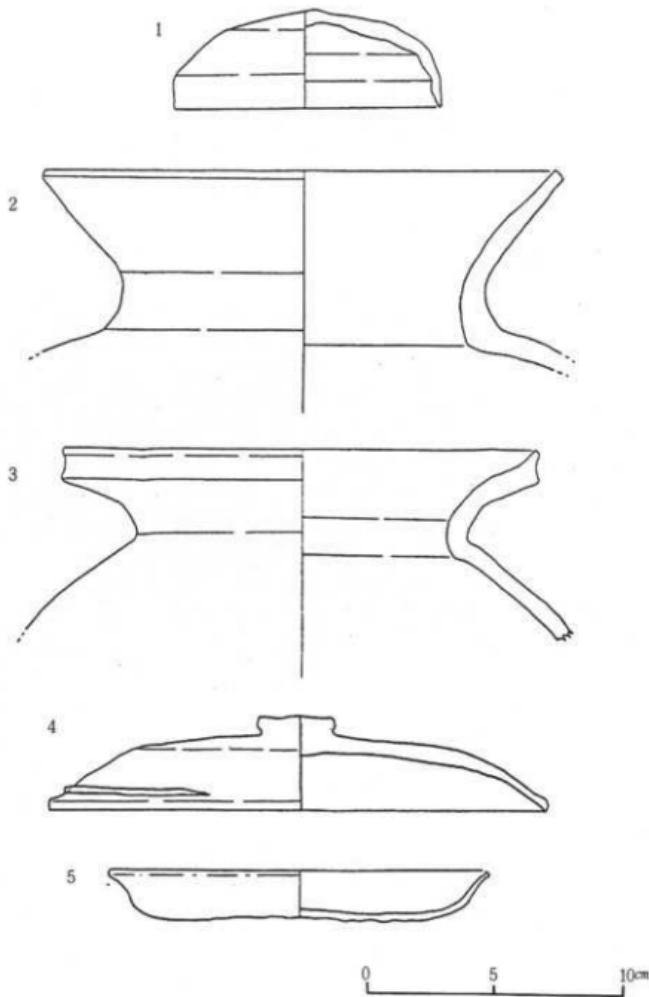
第4図 B トレンチ平面図



第5図 G57 竪穴遺構平面図

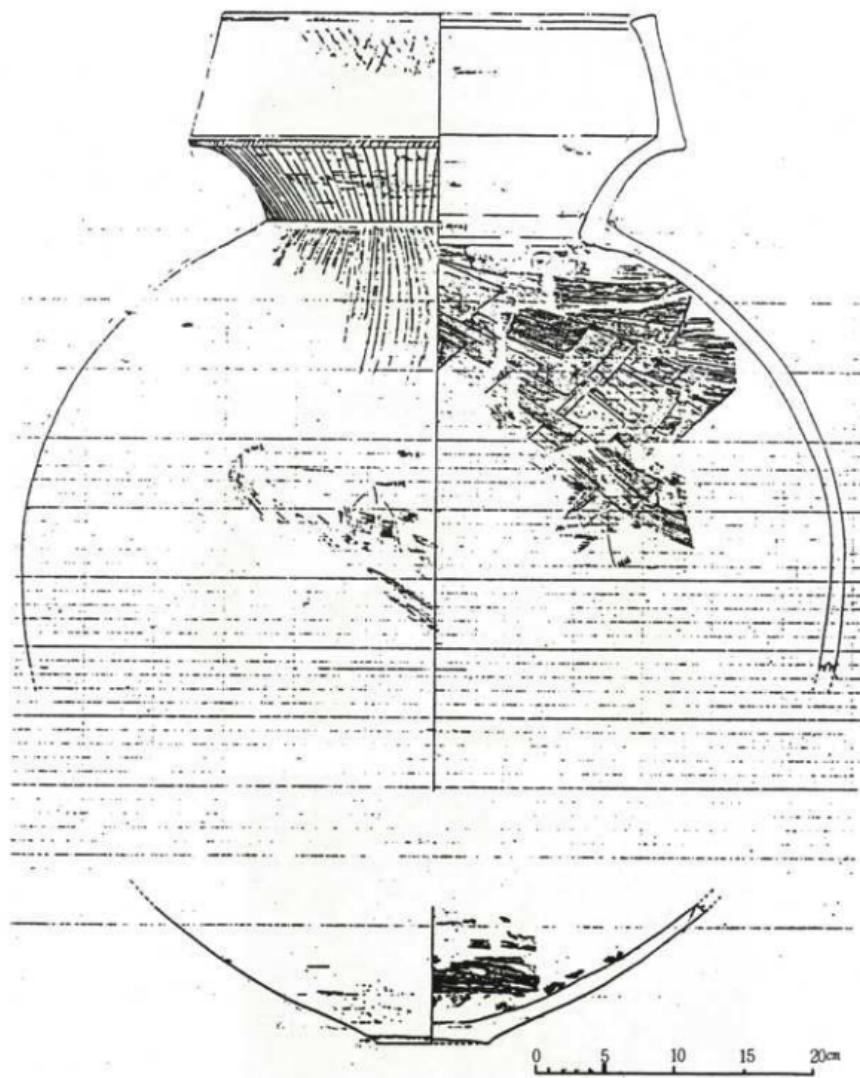


第6圖 G 13 配石墓平面圖



1. 2. 3 は溝内出土、4 は G57 より出土
5 は B トレンチより出土

第7図 遺物実測図

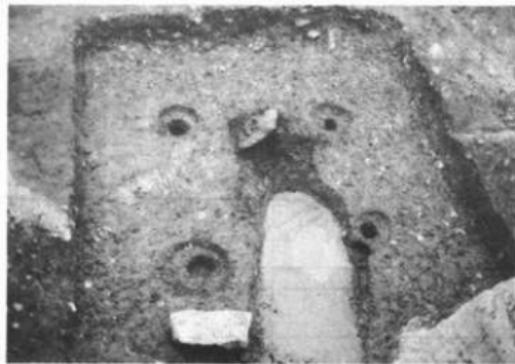


第8図 複合口縁壺（溝内出土）

図版 1. 遺構



B トレンチ
掘立柱建物遺構



G - 57
堅穴遺構



G - 13
配石墓

図版 2. 遺 物



複合口縁壺（溝内出土）

9. 平井遺跡確認調査

1. 所在地 三木市平井

2. 調査員

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和55年11月21日~昭和55年12月10日



第1図 調査位置図

4. 調査に至る経過

三木市平井地区において、は場整備事業

が計画されたので、事業予定地内の埋蔵文化財分布調査を行なったところ、広範囲にわたり土器片の散布していることが確認された。よって、三木市教育委員会では事業に先立って埋蔵文化財確認発掘調査を実施するにいたった。

5. 調査概要

(1) 調査の方法

調査は遺跡確認調査という性格から $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを設定し、遺構が検出された場合には、随時拡張することにした。その結果、14ヶ所を調査した。

(2) 調査結果

調査の結果、ほとんどが耕作土、床土、灰色砂質土、砂、礫となり、旧河川の氾濫であったことを示している。遺構を検出したのはグリッド3である。耕作下約75cmの深さで、約4.2m四方の住居址遺構を検出した。床面まで約10cmの掘込を持ち（遺構面は整地もしくは何らかの目的で削られていたため、床面までの深さは疑問である）、直徑約24~30cm、深さ約20cmの柱穴4ヶ所を、四柱に柱間約2.2mで配しており、その他住居址内に大小の不明ピット3個、土括3個、焼土面2ヶ所、外に径約30cm、深さ10cm程度のピット1個を検出した。

遺物は、住居址内よりほぼ完形に近い須恵器の杯身、土師器のカヌ、ツボ、土鍤などが出土した。

6. まとめ

今回の調査によって、6世紀後半の住居址の遺構を検出したが、これは旧河川によって区切られた。高地に立地し、その範囲は南北約40m、東西約30mを計るが、遺跡確認調査ということから、周辺部に存在するであろう建物群の検出も行なっていないため、建物址そのものの性格は不明である。

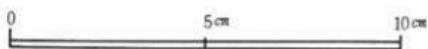
しかし、この範囲は設計変更により保存がはかられている。



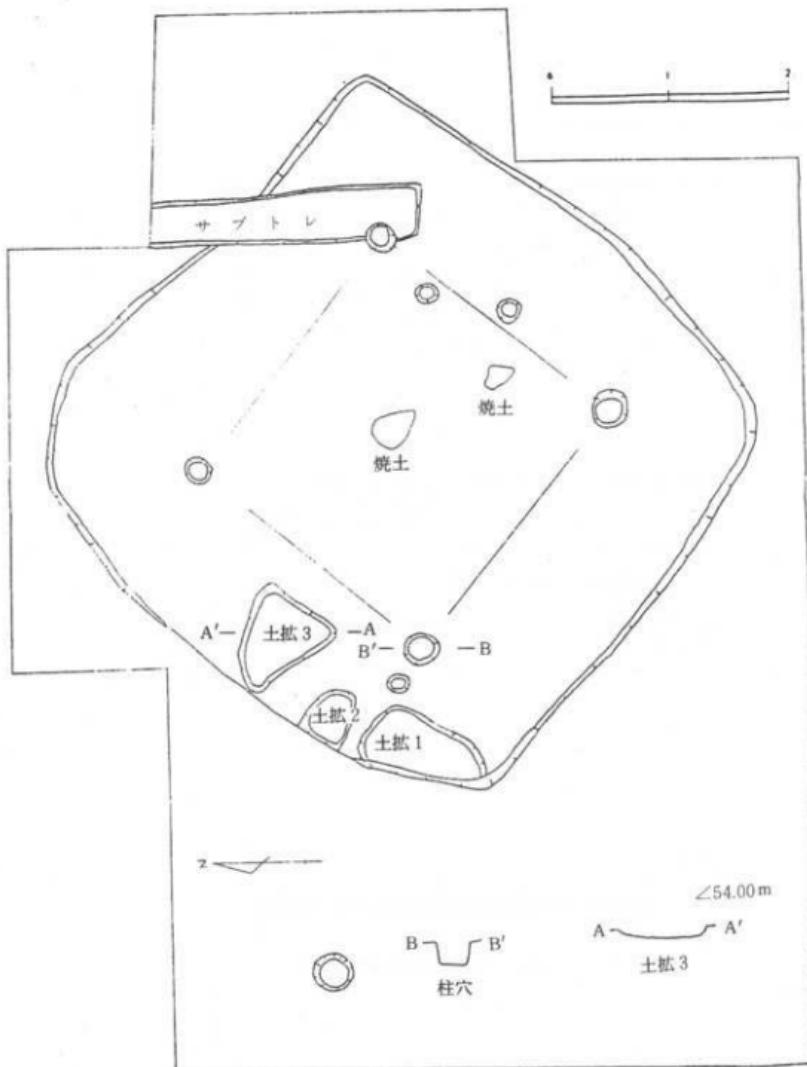
坏身



刃



第2図 住居址内出土遺物実測図



第3図 G-3 住居址平面図

図版 1. 遺構、遺物検出状況



住居址 遺構



住居址内遺物検出状況

10. 戸田西遺跡確認調査

1. 所在地 三木市志染町戸田

2. 調査員

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和55年12月1日～昭和56年1月10日

4. 調査に至る経過

戸田地区は場整備事業に伴なって分布調査を行なったところ、須恵器、土師器などの土器片を採集したため、遺跡の有無・範囲等の確認を目的として調査を実施した。

5. 調査概要

分布調査結果から、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ のグリッドを37ヶ所設定し、調査したところ、グリッド1においてピットを確認したため拡張した。結果、直線上に並ぶピット3ヶとその他に2ヶのピットを確認した。これらは、建物の柱穴と考えられる遺構ですが、設計どおり工事を進めても現場保存できる深さであるため、規模を確認しなかった。

他のグリッドでは、土器片の出土はあるが遺構等の存在は認められませんでした。



第1図 調査位置図

11. 三木城発掘調査

1. 所在地

三木市上の丸町4番5号

2. 調査員

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和56年2月10日～昭和56年6月10日



第1図 調査位置図

4. 調査に至る経過

市立図書館と美術館が、旧三木高等学校の跡地に建設されることになった。この地は、三木城の西の丸とも南の構えとも伝えられている所にあたっているため、確認調査を実施した。その結果、一面に広がる炭層や備前焼の大甕片を確認するにいたり、建設面積1,800m²を対象とした全面調査を実施することとなった。

5. 調査概要

(1) 遺構

建物跡は基礎石が直線上に並び、雨落ち溝が確認された。

内掘は幅約5mで底はヘドロ状になっているため水が溜っていたものと考えられる。備前焼大甕群は、16個の掘り方を確認したが、大甕は14個出土した。3個ずつ5列に並び、端では1個になっている。このように3列に並んでいるのは全国でも例がなく、群として出土しているのでは、和歌山県の根来寺、福井県の朝倉館跡等がある。また、大甕より炭化した麦粒が出土しており、これらの大甕群は食糧庫として使用されていたものと考えられる。大甕群より内掘をはさんで西側に井戸が検出された。この井戸は径1.1mで、川原石を使用して、ていねいに積み上げられている。4mまで掘込んだが危険なため中止した。推定であるが、本丸跡公闇の井戸の深さが12.7mあり、ほぼ同じくらいあると思われる。また、井戸から石組溝が西へ続いており、排水利用の溝と考えられる。

(2) 遺物

備前焼大甕は14個出土したが、そのうち5個体をとりだし復元している。そのうちの1個を例にとれば、口径84.5cm、胴径78.5cm、高さ66.0cm、底径42.0cmである。胴上部外面に〔三入〕ときざまれており、三石入の大甕と思われる。また、底部外面及び胴下部にヒビ割れがあり、そこに漆で修復された跡が残っている。大甕の制作年代は16世紀初め頃で、備前焼がもっとも繁栄していた時代である。

軒丸瓦は3片出土しており、うち1個はほぼ完形で出土した。模様は左巻の巴で、まわりに連珠を配している。他に瓦質の羽釜や土師質の小皿等もかなり出土している。

(3) まとめ

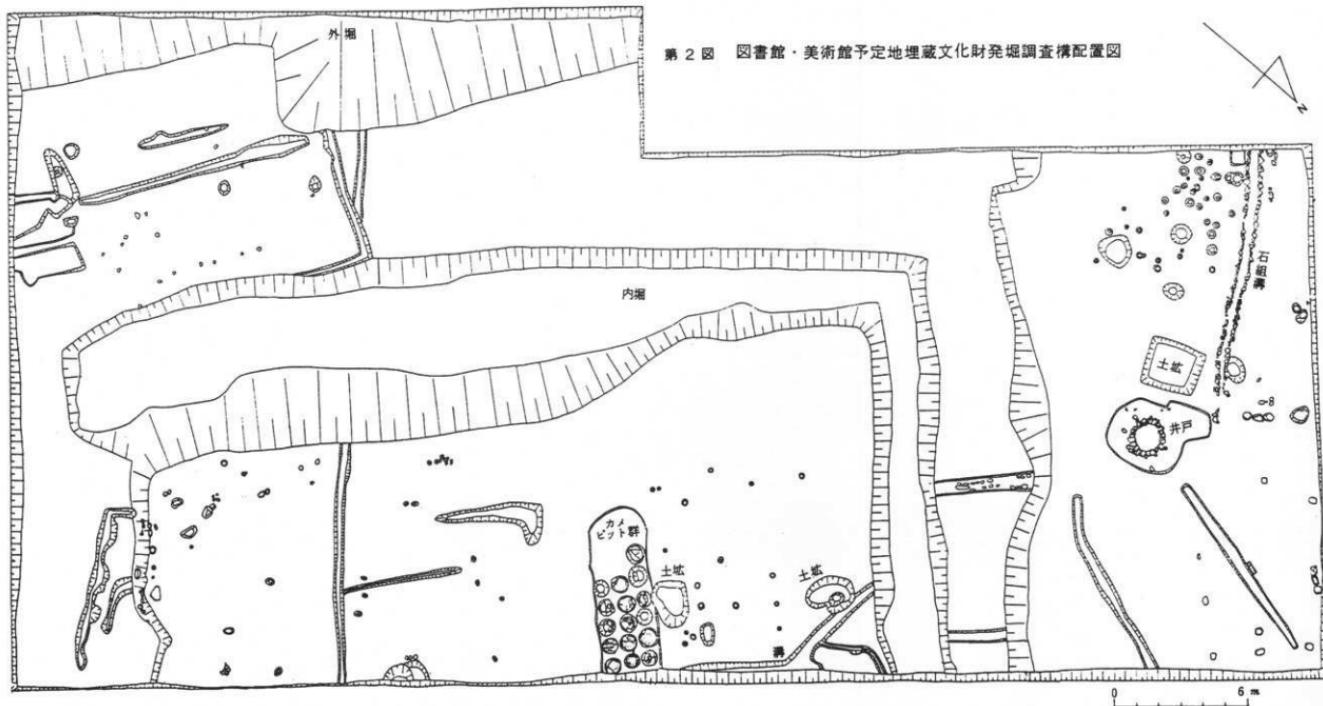
当初、学校のグランド及び校舎になっていたため、遺構はないと思われたが、今回の調査で遺構の存在が確認された。

今回の調査地域は三木城の西の丸になると思われるが、今回の調査範囲だけでは、三木城絵図等もないため、城のどの位置なるか判断できない。

今回の調査で最も注目されるのは、備前焼大甕群で、このような出土例は全国的にも珍しく、重要な遺構である。この一角は、設計変更をし埋戻して現状保存している。

三木城全体からみれば、今回の調査はほんの一角で、各遺構の検出にとどまる結果になったが、今後調査範囲を広げることによって城の全容が明らかになるであろう。

第2図 図書館・美術館予定地埋蔵文化財発掘調査構配置図



図版 1. 遺 槽



大 壺 群

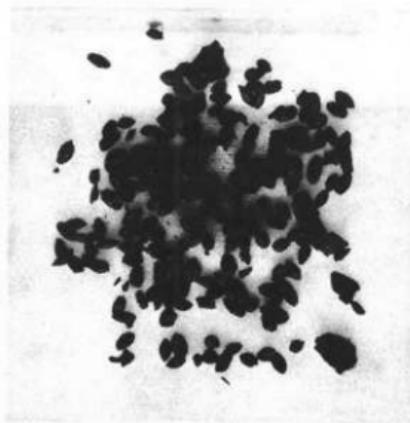


全 景 (西側より)

図版2 遺 物



復 原 大 瓢



大 瓢 内 出 土 麦 粒

12. 吉田群集墳第2群 1・2号墳発掘調査

1. 所在地

三木市志染町吉田字一本松谷

2. 調査員

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和56年7月20日～昭和56年11月25日



第1図 調査位置図

4. 調査に至る経過

志染町吉田字一本松谷において、自由ヶ丘中学校を建設することになったが、予定地内には、吉田古墳群第2群の7基が存在しており、この取り扱いについて現状保存を前提とした協議をおこない、1・2号墳は発掘調査による記録保存に、残る5基は一群になっているため現状保存とすることが決まった。

5. 調査概要

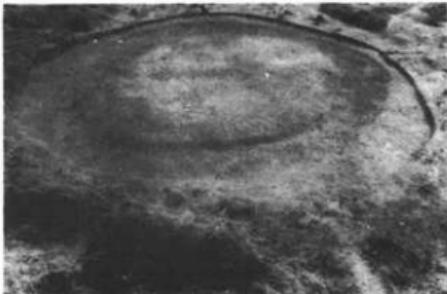
当該古墳群は、志染川左岸に存在する吉田南遺跡（弥生中期～鎌倉期）と、東吉田遺跡（古墳期～鎌倉期）の南背後の丘陵に位置する。大別して2群に分けることができ、1群は丘陵北端に位置し、15基で構成されるが、昭和43年に6基の調査がおこなわれました。2群は、1群より南に位置し、先に述べたとおり7基で構成されています。

今回の調査は、2群の1号墳と2号墳を対象としていましたが、2号墳の南側において全壌した古墳を確認したため、この古墳を含めて実施しました。

(1) 1号墳

2群中の北端にあり、墳丘の東側と西側に土取りによる破壊がみとめられる。現況の規模は、墳丘の高さ約1.5m・径約14mを測る円墳である。

墳のはば中央部で、東端を土取りで失った東西方向の主体部を確認した。主体部の遺存状況は残存長約2m・幅約0.7mで、底には約1cm厚に砂が敷詰められていました。また、底部西端に近いところで、



1号墳完掘後

排水溝とみられる幅10cmの溝を検出しています。

主体部の上面で、こぶし大の礫を多數検出した。これは、埋葬後に主体部を覆っていたものと考えられる。

調査前の外観では、周濠の形跡が認められなかったが、調査によって、全周する幅約2.8m、深さ約0.2mの周濠を検出した。これによって、墳丘の基底部は径14m、(周濠を含めると径20m)と確認できた。

遺物としては、主体部内からの出土はなかったが、墳丘部より須恵器片数点と周濠内から集中して大型短頸壺の破片が出土した。

(2) 2号墳

1号墳の南に位置し、径約15m高さ約1mの円墳である。墳は全体に大きく乱れ、土取りや盗掘を受けたものと思われる。主体部も、まったく、認めることはできず遺存状況は最悪であった。墳丘裾部にトレンチを設定し、周濠の検出に努めたが認められなかった。

遺物についても、破片が数点出土した程度である。

(2) 8号墳

1・2号墳調査中に、2号墳南において須恵器片を数片採集したため、精査したところ全壊した古墳と考えられるので、8号墳と番号付し、十字にトレンチを設定土層観察をおこなった結果、南北に設定したトレンチの北側で、墳丘の裾と壺・杯の破片を検出した。

推測したとおり古墳と考えられるが、規模を確認することはできなかった。

13. 高男寺廃寺遺跡確認調査

1. 所在地

三木市志染町高男寺字寺ヶ谷

2. 調査員

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和57年5月13日～昭和57年7月20日



第1図 調査位置図

4. 調査に至る経過

志染町高男寺、細目の山林を宅地造成する計画で、大和ハウス工業株式会社より埋蔵文化財の有無の問い合わせを三木市教育委員会が受けた。

対象地域には高男寺廃寺推定地及び県指定文化財の経筒の出土推定地が含まれているため分布調査が必要となった。昭和56年3月県立三木東高校教諭岡本道夫氏、市立三木中学校教諭西阪義雄氏の協力で分布調査を実施した。

その結果、皿池内で多數の土師器片及び瓦片を採集、また薬師堂裏山林で多數の瓦片を採集した。なお、経筒出土推定地はすでに山林から木材を出すときに道を作ったため破壊されていた。

このため、確認調査の必要を大和ハウス工業株式会社に申し入れ、協議の結果、原因者負担で確認調査を実施することとなった。

5. 調査概要

遺構の有無及び範囲を確認するため、9本のトレンチを地形に応じて設定、それぞれにA～Iの記号を付して調査を進めた。Bトレンチの南端で瓦の堆積を検出、除去したところ、東の方向へ続く石組の溝と縁石と思われる石を確認した。そのため、東方向へトレンチを池の堤まで延長した結果、石組の溝は西から東へ傾斜し、池の堤内へ続くことがわかった。また、縁石も溝にそって5間分まで確認したが、溝と同様に池の堤内へ続く。縁石の間隔は西端で2mを測るが、それ以外の四間は各3mを測る。

検出した石組溝及び縁石から建物が判断されるが、周囲の地形や、高男寺縁起などから九間四面の規模をもつ本堂が推定される。

瓦の堆積層からは、径18cmのものと径16cmの2種類の左巴文軒丸瓦や、「貞和二季卯月二日大工藤原光真作」と銘の入った軒平瓦などが多數出土しました。また、鬼面の一部が欠落してはいるものの、ほぼ完形に近い鬼瓦が出土したことは特筆できるだろう。

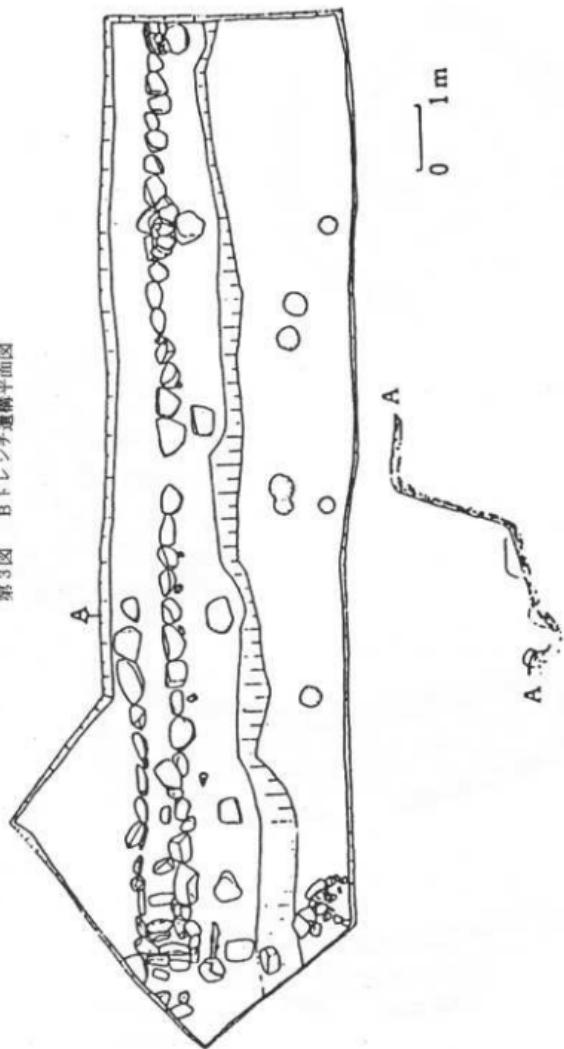
6. まとめ

高男寺の創建時期は明確ではないが、明治のはじめ頃、仁平三年（1153年）の銘の入った経筒が出土していることから推察すると、仁平三年以前と考えられる。今回出土した軒平瓦には「貞和二季」の銘がみられる。貞和二季は、1346年にあたるため、検出遺構は建替え後の遺構と思われる。また、廃絶の時期も不明だが、縁起には天正年間の三木城攻めの折りに、羽柴秀吉方によって焼打ちされたとあり、これを裏付するように焼けた形跡が遺構面にみられるところから、天正年間に廃絶したと考えられる。

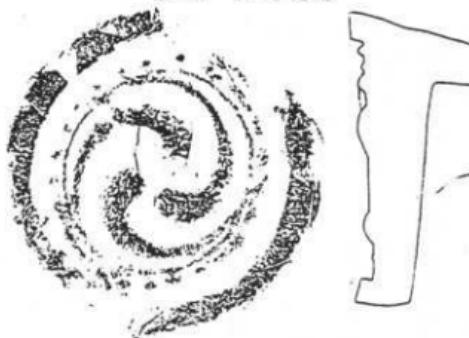
第2図 トレンチ設定図



第3図 Bトレンチ遺構平面図



第4図 軒丸瓦 ①



第4図 軒丸瓦 ②



第5図 軒平瓦 ①



第5図 軒平瓦 ②



14. 三木城鷹ノ尾遺跡(第1次調査)発掘調査

1. 所在地

三木市福井字鷹ノ尾

2. 調査員

三木市教育委員会 毛利哲夫

3. 期間

昭和57年7月1日～昭和57年7月15日

4. 調査に至る経過

三木市国有林の一角に、文化会館が建設されることになった。建設地は三木城の城域内で、鷹ノ尾城とも鷹ノ尾の砦とも呼ばれる地の東半部にあたるため、表面調査を実施したところ、予定地を東西に分断する市道三木山幹線の西側地区で、井戸及び建物跡が推定される平坦地を、東側地区で、1段から2段の段状を認め、確認発掘調査を実施することになった。



第1図 調査位置図

5. 調査概要

今回の調査は、市道西側地区を対象として、建物跡と推定される平坦地にAトレンチを、土塁と思われるところにBトレンチを、山頂の平坦面にCトレンチを設定し、確認をおこなった。Aトレンチでは建物跡を、Bトレンチで溝を検出した。Bトレンチで検出した溝の広がりを確認すべく、新たにD・E・Fのトレンチを設定した。

遺構・遺物

(Aトレンチ)

建物跡と推定されるところで、一部地山を削り、また盛土をして平地にしている。建物の基礎石から南北に4間、東西に2間確認された。井戸は深さ約4.6mあり、素掘りである。井戸をはぼりまいて溝があり、井戸からの排水溝が続いている。

遺物は信楽焼壺、東山焼染付、土師質灯明皿、瓦質羽釜等が出土しており、いずれも19C以前のものである。

(Bトレンチ)

土塁を確認する意味で試掘した結果、土塁ではなく、不用の石を集めて集石したものと解った。しかし現在の溝の下に地山を掘り込んで作られた溝が検出された。

また、溝遺構上層で奈良時代のものと思われる須恵器片と円面鏡片が出土しており、盛土によるものと思われるが断定はできない。

(C トレンチ)

腐養土下は地山で遺構は検出できなかった。

(D トレンチ)

B から続く溝の検出を目的として設定したが、その溝とともに土塹と溝 3 本を検出した。

土塹は幅 1.2 m で深さ 0.8 m で一部石組をしている。

遺物は、A と同じ遺物が出土しており、ほぼ同時期と考えられる。

(E トレンチ)

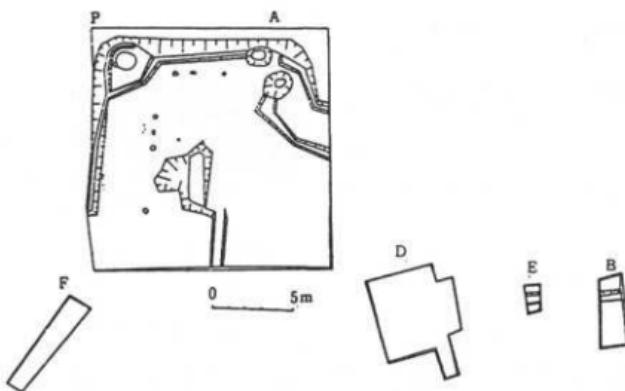
B から D のほぼ中間で、B の溝幅がかなり差があるため同じものであるか確かめるため設定した。その結果、B・E・D の順に幅が広くなっており、統くものである。

6. ま と め

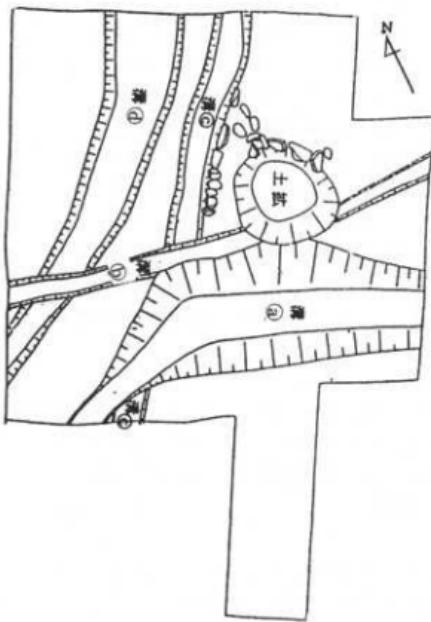
今回の調査は、三木城の一角にある鷹ノ尾城とも砦とも推定されるところであり、その遺構の検出を目的としたものであったが、その時代の遺構・遺物は全くなく、江戸時代後半の建物跡及び溝等を検出しただけである。



第2図 三木鷹ノ尾調査地区平面図



第3図 三木鷹ノ尾Dトレンチ平面図



15 三木城鷹ノ尾遺跡（第2次調査）発掘調査

1. 所在地 三木市福井字鷹ノ尾

2. 調査員 三木市教育委員会
毛利哲夫、松村正和

3. 期間 昭和57年12月13日～
昭和58年2月28日

4. 調査に至る経過

三木山国有林の一角で文化会館が建設されるのに伴い、建設予定の西半部を対象に実施した1次調査に引き続いて、東半部を対象として2次調査をおこなうことになった。

5. 調査概要

今回の調査区は、建設予定地を東西に分断する市道の東側で、分布調査によって認められた段状と、人工的に築かれたと思われる高まりを中心に調査した。

段状は、東面する段と南面する段がある。東面する段は、土取り等による攪乱を受け、遺存状態は良好とはいえないが、2段の段状を確認することができた。上段は、長さ約2.3m奥行き約5mを測り、南面する段と同レベルで一体となっている。下段は、長さ約2.5m奥行き約7mを測る。南面する段は、前記したとおり東面の上段からL型に続く段で、長さ約8.0m奥行き約6m高さ約1.8mを測る。遺存状況は良好であった。これらの段が、土盛りによって築かれていることを確認した。（A地区）

山頂部で認めた高まりは、頂部が平坦で、南、東面に段をもつが、西、北面は、地形にとけこむような傾斜である。全形を明らかにすべく、表土等を排除したところ、南面で3段に積まれた列石を確認した。また、排土中から高杯脚片等の須恵器を数片採集した。

6. まとめ

東面する段状は、古道の兵庫道に面しているため、防衛及び城域界を意味すると考えられる。南面する段状は、東から西へ深くなる谷に面し、段の高さ奥行きは、谷が深くなるにつれ除々に低く狭くなり、自然傾斜となって段はみられなくなる。この様に段状の築かれ方が、周囲の地形に関係していることから、攻め手に対する防衛と城域を界する目的をもつていると考えられる。

また、頂部の高まりも段状遺構同様に、南及び東を意識して築かれており、物見台と考えられるが、出土遺物から見れば古墳の存在を伺わせるものであり、古墳の墳丘を利用し、南

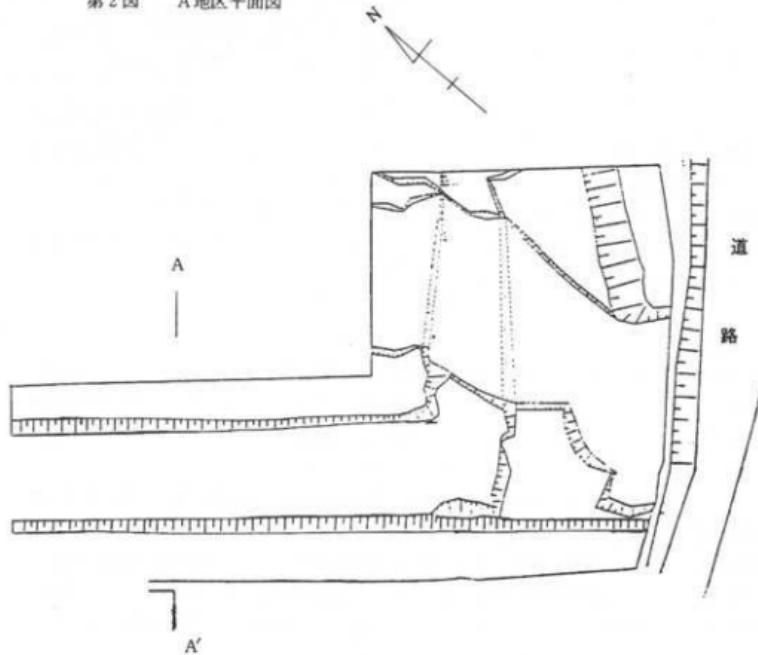


第1図 調査位置図

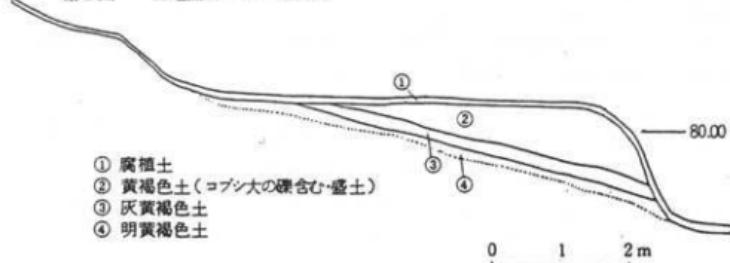
面及び東面の一部に手を加えて物見台に仕上げたと推測している。

なお、この物見台と思われる高まりは、前述したとおり古墳と考えられるため、再度発掘調査をおこなうことになった。

第2図 A地区平面図



第3図 A地区A-A'断面図



16 東吉田遺跡確認調査

1. 所在地 三木市志染町東吉田

2. 調査員 三木市教育委員会
毛利哲夫

3. 期間 昭和57年8月1日～
昭和57年9月10日

4. 調査に至る経過

は場整備事業が計画されたのに伴い、
事業区域内の埋蔵文化財分布調査を行った。



第1図 調査位置図

たところ、須恵器片等の散布が認められたので、事業に先立って遺構の有無、範囲等を確認するため、発掘調査を実施することになった。

5. 調査概要

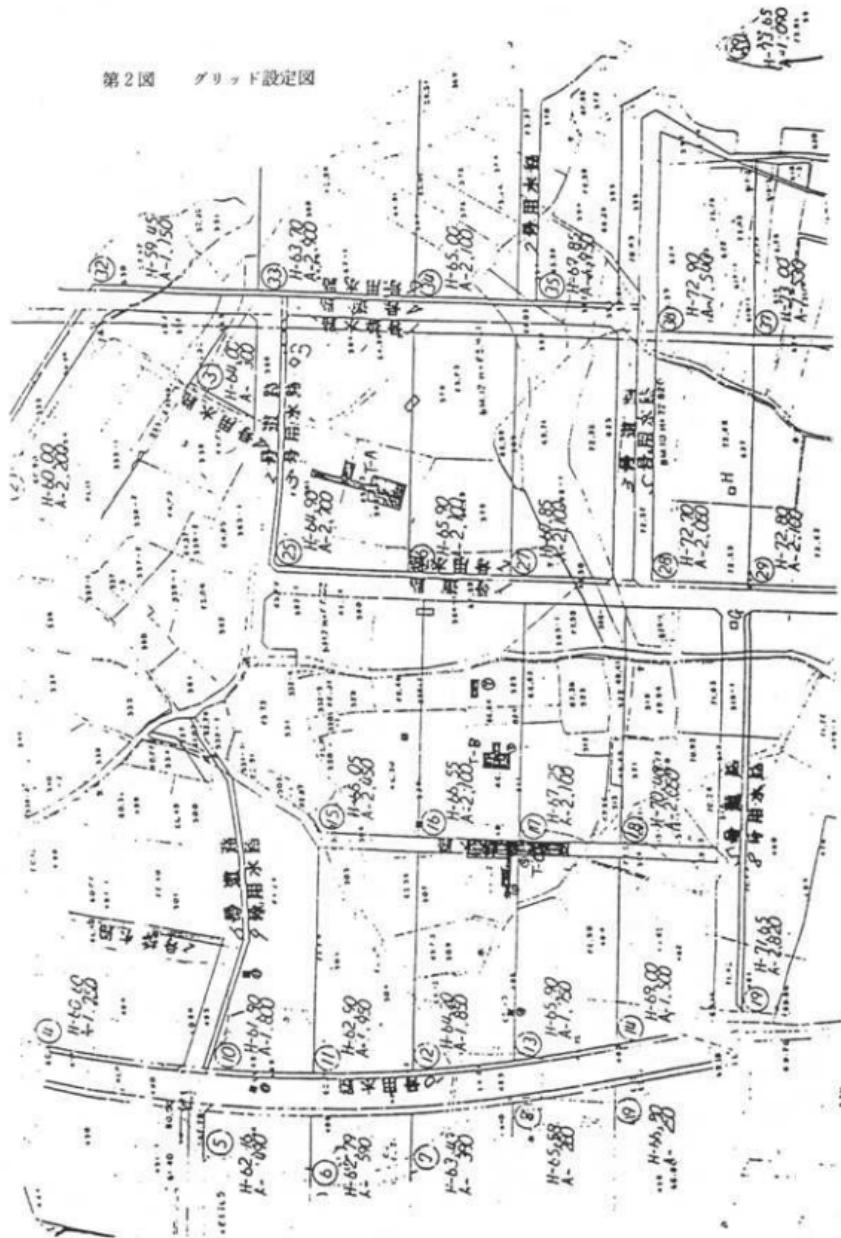
調査地は、美の川の支流志染川の南に位置する河岸段丘上で標高5.4m～7.3mの水田である。調査は、2m×2mのグリッドを9ヶ設定し、グリッド3及び7～9でピット等を検出したため、グリッド3、8、9をトレント掘りにし拡張した。グリッド3をトレントA、グリッド8をトレントB、グリッド9をトレントCとした。

トレントAの層序は、上層から耕土、床土、灰茶色砂質土、黄灰色砂質土の順である。遺構は茶黒色砂質土上面で鎌倉時代の柱穴を確認し、黄灰色砂質土上面で古墳時代の住居址を検出した。特筆すべき出土遺物として、器台の杯部が出土した。トレントBで多数の柱穴と土括を検出した。建物の配置関係は明確ではないが、鎌倉時代と考えられる。トレントCは、排水路計画上に設定したもので、同様に柱穴を確認した。時期も同じく鎌倉時代と考えられる。

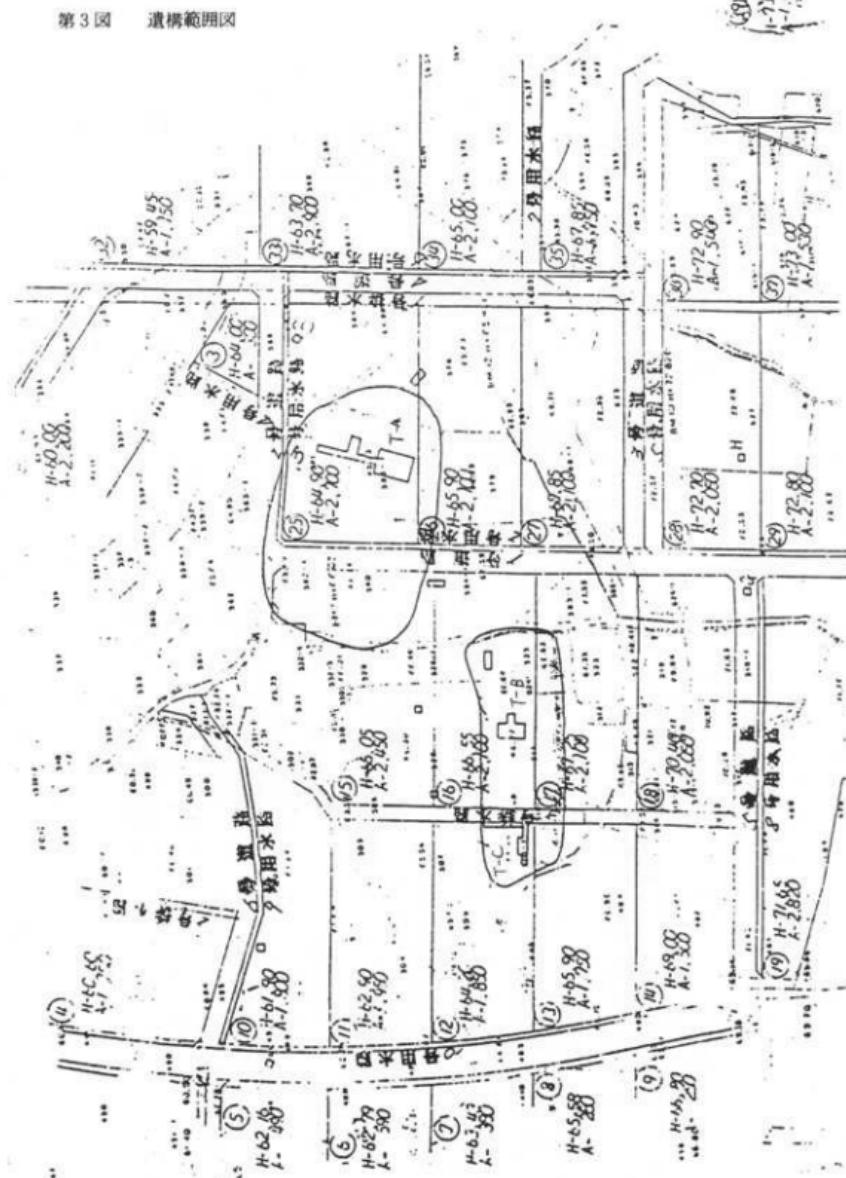
6. まとめ

トレントCは、排水路計画上のため記録にとどめたが、トレントA、トレントBで検出した遺構は、埋戻し保存として残されることになった。

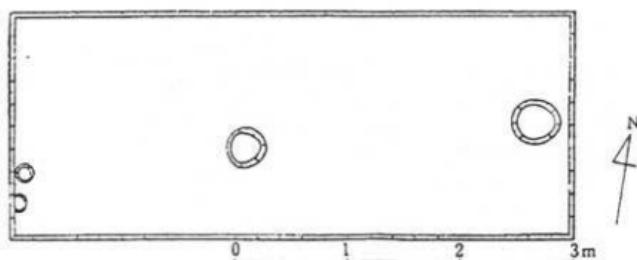
第2図 グリッド設定図



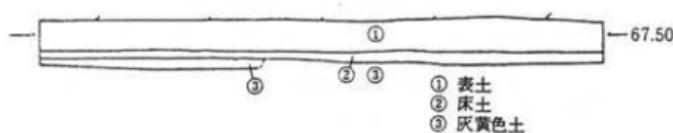
第3図 遺構範囲図



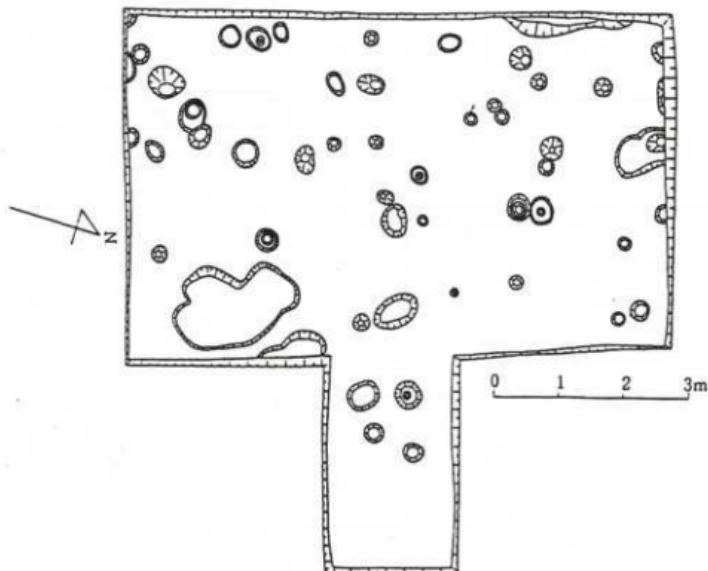
第4図 Ak.7 遺構平面図



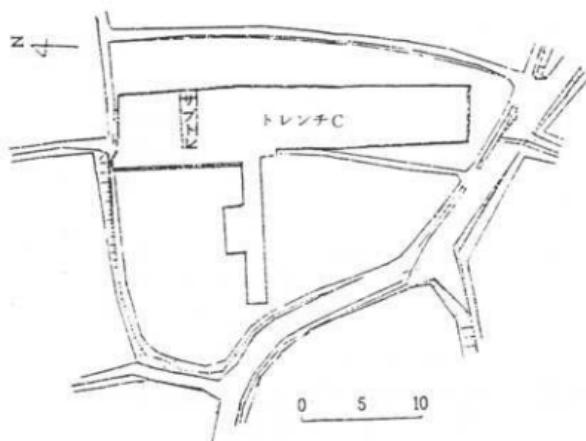
第5図 Ak.7 北面土層図



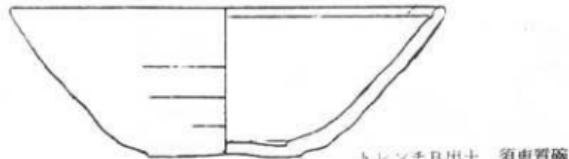
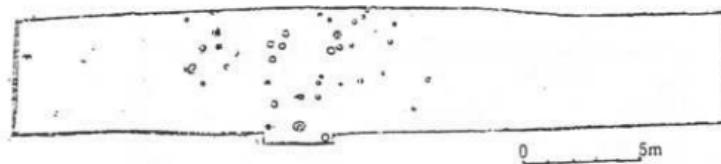
第6図 トレンチB



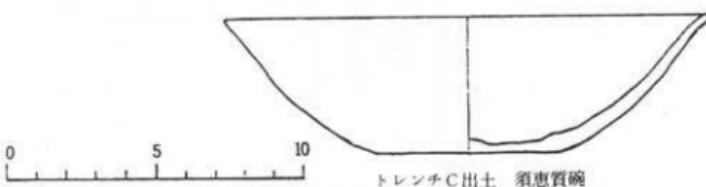
第7図 トレンチC 設定図



第8図 トレンチC 平面図



トレンチB出土 須恵質碗



トレンチC出土 須恵質碗

図版一遺構



トレンチB（西側より）



トレンチC（北側より）

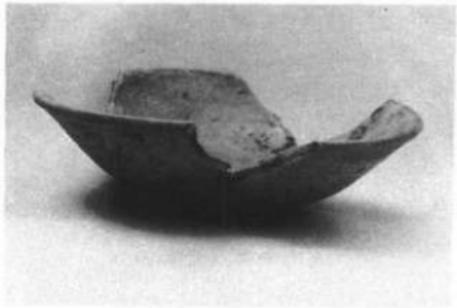
図版一遺物



器台 杯部 (トレンチA 住居址内出土)



須恵器碗 (トレンチB出土)



須恵器碗 (トレンチC出土)

17 三木山古墳1号墳発掘調査

1. 所在地 三木市福井字鷹ノ尾

2. 調査員 三木市教育委員会

毛利哲夫・松村正和

3. 期間 昭和57年7月12日～
昭和58年9月14日

4. 調査に至る経過

文化会館建設に伴い、57年度に2次にわたっておこなった確認調査で、古墳と考えられる高まりを山頂で認めたため、調査をおこなうことになった。調査にあたり、三木山古墳1号墳と呼ぶことにした。

5. 調査の概要

当古墳は、市街地南背後にひろがる三木山国有林の北端にあたり、東から西へ延びる尾根の山頂に位置する。

調査は十字にセクションを設け、それを1区～4区とした。各区において主体部を検出し、合計5基の主体を確認するに至った。

各主体部については、次のとおりである。

〔第1主体部〕(第3図)

第1主体は、南北の方向をもち中央より西に位置する。棺は長さ2.4m、幅約0.5mの木棺で、両小口部に石と粘土を押しあてている。

出土遺物は、棺内から杯転用枕と刀子3本、そして切り子玉、小玉、管玉の玉類を検出した。棺外からは北側小口付近で、杯3セット分を一括して検出した。

〔第2主体部〕(第4図)

第2主体は、東西の方向をもち中央より北に位置する。棺は長さ約2m、幅約0.45mの木棺で、両小口部に粘土塊を押しあてている。

出土遺物は、棺内から鉄鎌類を検出した。棺外からは両側小口付近で、杯2セット、杯蓋、壺を一括して検出し、東側小口付近で杯4セットと提瓶を一括して検出した。

〔第3主体部〕(第5図)

第3主体は、東西の方向をもち中央より南に位置する。棺は長さ約2.4m、幅約0.5mの木棺で、両小口部に粘土塊を押しあてている。

出土遺物は、棺内から杯1セットと鉄鎌類を検出した。棺外からは東小口周辺で杯5セット分を検出した。



第1図 調査位置図

〔第4主体部〕(第5図)

第4主体は、第3主体の北側に接するように並び、同じ掘り方内にある。棺は長さ約2.1m、幅約0.45mの木棺で、両小口部に粘土塊を押しあてている。

出土遺物は、棺内から鉄鍵類を検出した。棺外からは東小口付近で杯5セット、蓋付短頸壺、馬具(くつわ)を検出した。

〔第5主体部〕(第6図)

第5主体は、東西の方向をもち、ほぼ中央に位置し、地山掘り込の掘り方をもつている。棺は、長さ約2.6m幅約0.6mの木棺と考えられるが、他の主体部のように両小口に石や粘土塊は見られない。しかし、棺の両側に頭大の河原石が2段程積まれている。

出土遺物は、棺内から耳環1個と鉄鍵類を検出した。棺外からは東小口付近で杯5セット、提瓶、蓋付短頸壺を検出した。

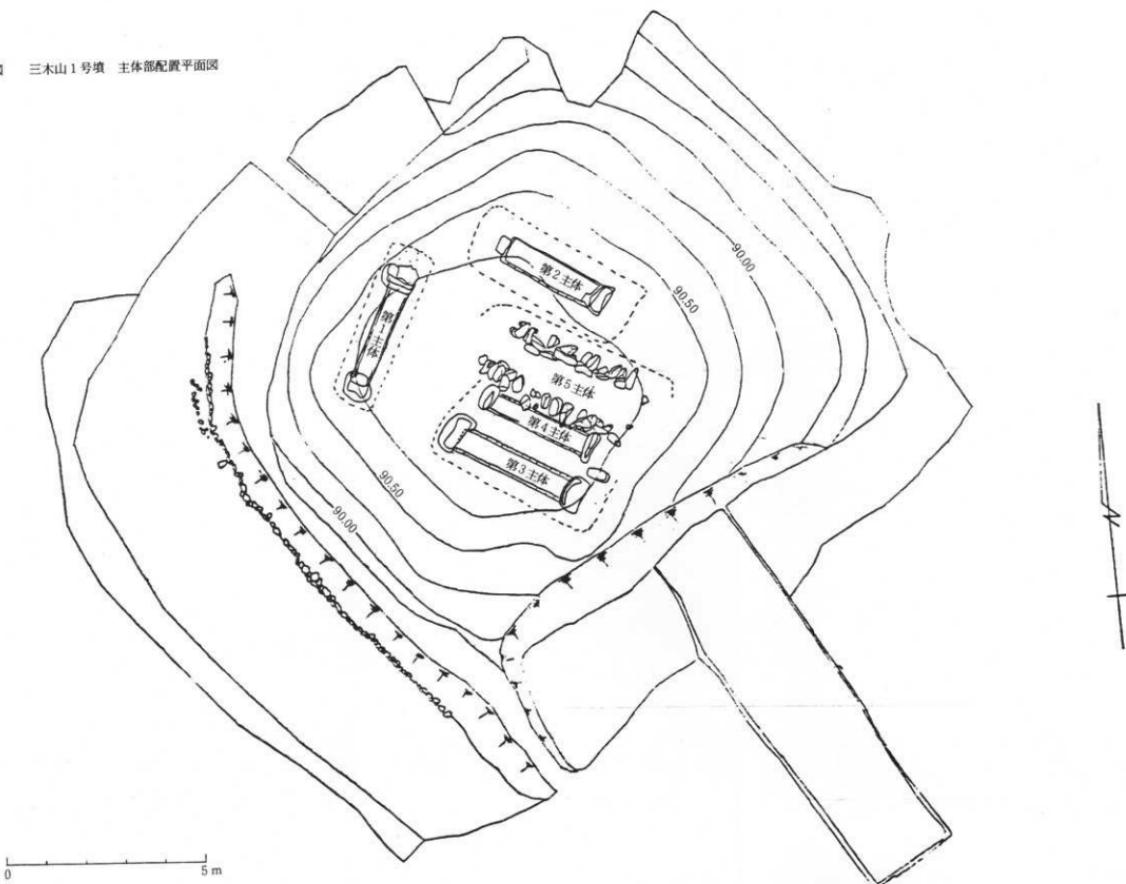
6.まとめ

当調査で予想したとおり古墳であることが確かめられたが、遺存状況もよく五体の埋葬施設が確認された。

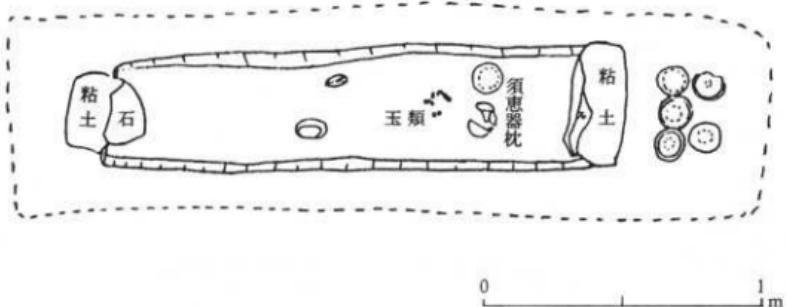
主体部の構造や方向など相互に類似するところがあり、一家族の墳墓と考えられる。埋葬順序は、遺物等の検討を加え下すべきであるが、調査状況からあえて考察するなら、築造時の埋葬は、墳丘中央部にあり地山掘り込みの掘り方をもつ第5主体で、最後の埋葬は他と異なる方向をもつ第1主体と考えられる。

古墳の築造時期は、6世紀前期後半頃と考えている。

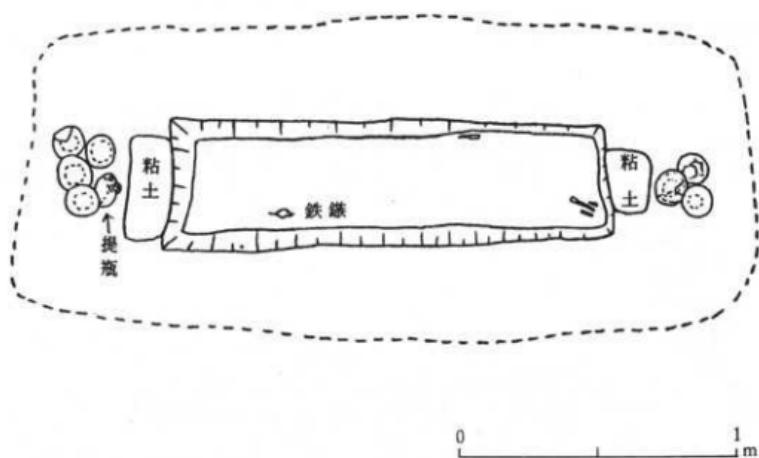
第3図 三木山1号墳 主体部配置平面図



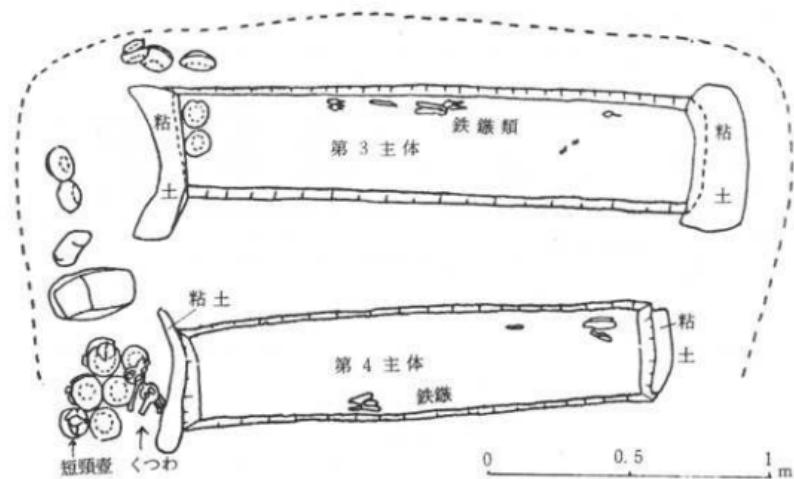
第3図 第1主体部実測図



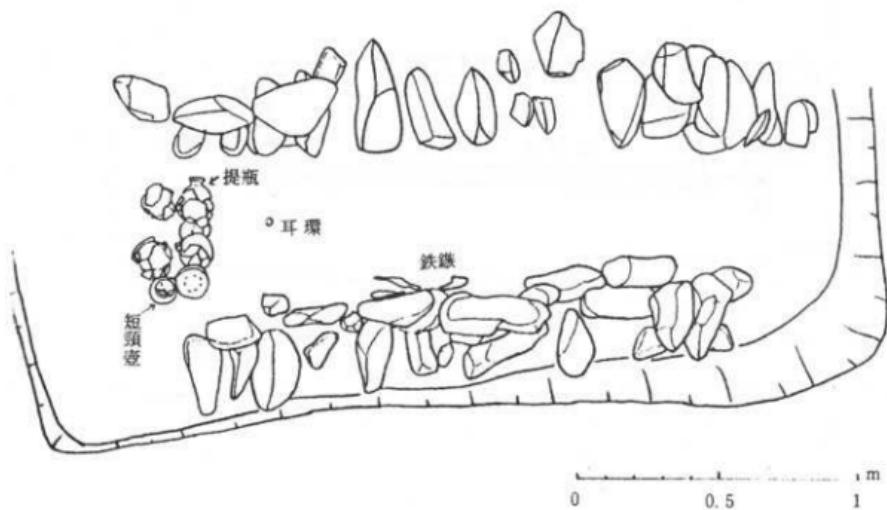
第4図 第2主体部実測図



第5図 第3、4主体部実測図



第6図 第5主体部実測図



圖版一遺構



古墳全貌



主体部検出状况

18 高男寺本丸遺跡確認調査

1. 所在地 三木市志染町細目、高男寺
2. 調査員 三木市教育委員会
毛利哲夫・松村正和
3. 期間 昭和58年10月20日～
昭和59年2月29日
4. 調査に至る経過

昭和58年度より志染地区において、

県営は場整備事業が施工されることになり、初年度として細目地区と高男寺地区の一部が事業対象となつた。昭和55年度におこなつた分布調査結果で、ほぼ全域に遺物の散布が認められている。そのため確認調査を実施することになった。

5. 調査の概要

調査対象地域内の細目地区で 2×2 mのグリッドを29箇所、高男寺地区でグリッドの他にトレンチを含める41箇所に設定し調査をおこないました。

細目地区は、志染川・四合谷川の氾濫によると考えられる。砂層、砂礫層の堆積が全グリッドでみられ、遺構は検出されなかった。

高男寺地区では、中世に青木伊予守の居城があったとされる字本丸で設定した、グリッド№44・45・50・51・56で焼土面や溝・ピットを、道路計画上に設定したトレンチで柱穴やピットを検出しました。そのため、土地改良事務所、県教育委員会と取り扱いについて協議したところ、トレンチを設定した道路計画地から北側部分約 3000m^2 は、事業計画上設計変更ができないため、全面発掘をおこなうこととなった。

全面発掘調査の結果、2棟の掘立柱建物跡と多数のピット等を確認しました。

掘立柱建物1は、主軸をN-35°Eとする 3×3 間の規模をもつ。柱間の間隔は、南東隅から北へ $2.8\text{m} \cdot 2.8\text{m} \cdot 1.8\text{m}$ 、西へ $2\text{m} \cdot 2\text{m} \cdot 3\text{m}$ となっている。なお、西辺は、南北両端に柱穴を認めるものの、その間で柱穴は認められない。（第2図）

掘立柱建物2は、主軸をN-30°Eとする 2×3 間の規模をもつ。柱間の間隔は、南東隅から北へ $1.9\text{m} \cdot 1.9\text{m} \cdot 2.8\text{m}$ 、西へ $1.9\text{m} \cdot 1.9\text{m}$ となっている。なお、当建物も掘立柱建物1と同様に、西辺の両端に柱穴を認めるが、その間で柱穴は認められない。

（第3図）

遺物は、羽釜片、甕口頸部、碗片、左巴文軒丸瓦などが出土しました。また、天禧通宝招聖元宝の古銭が各一枚出土している。

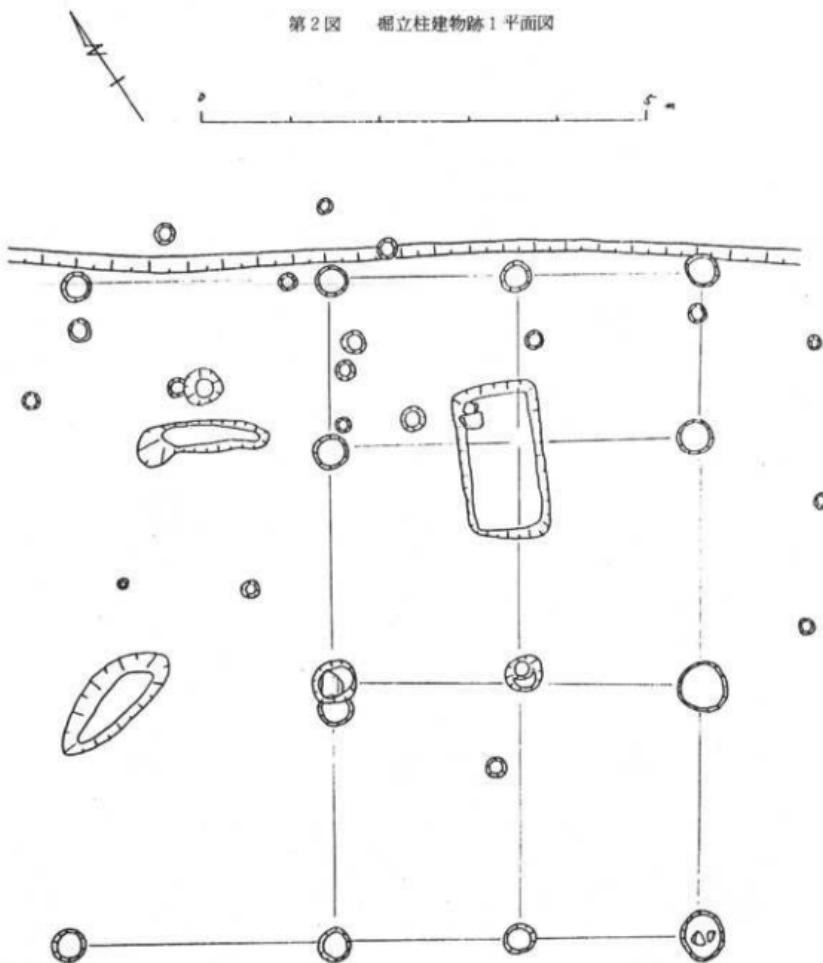


第1図 調査位置図

6. まとめ

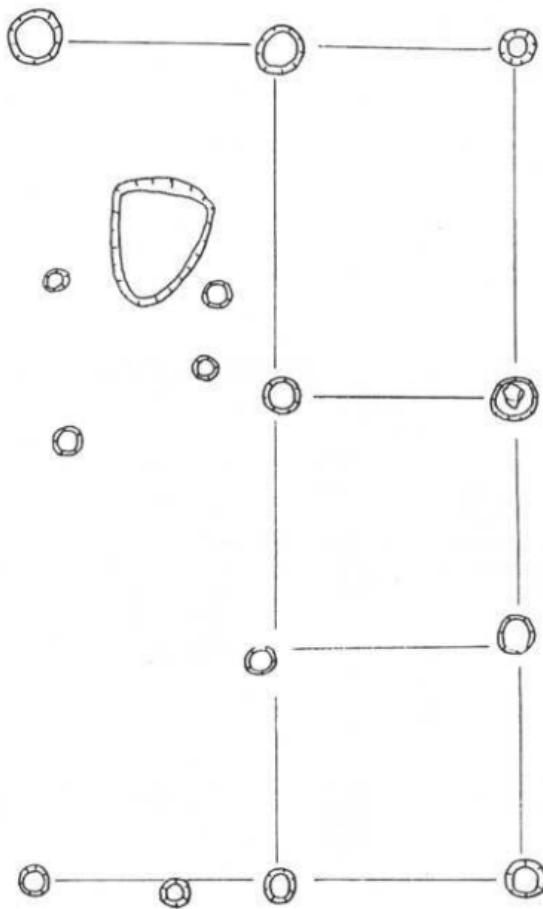
高男寺字本丸で検出した遺構は、出土遺物から鎌倉時代頃と考えられ、高男寺縁起にみる青木伊予守の居城の存在時期に相当すると思われる。しかし、この遺構を城館の一部とするには、全面発掘調査区が本丸地区の北端部であることや、グリッド調査であったこと。また、建物遺構の性格が不明確なことなどから言及しがたい。

第2図 堀立柱建物跡1 平面図





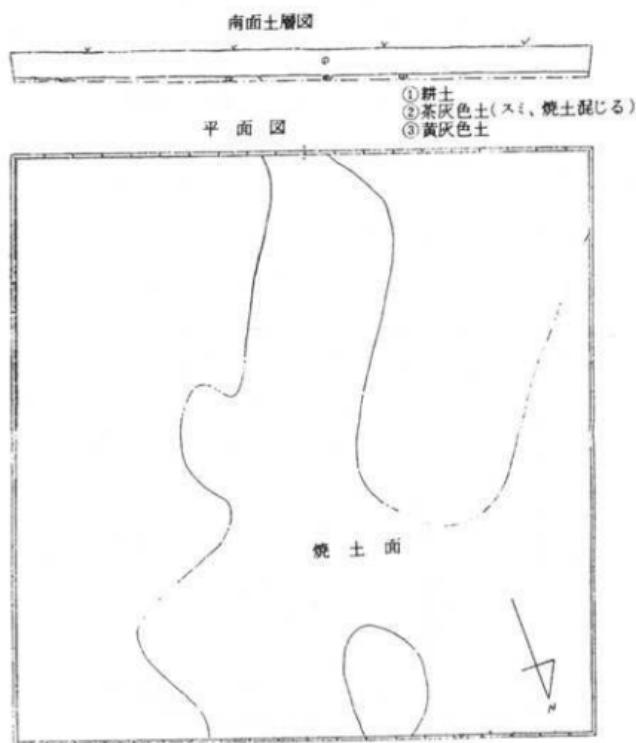
第3図 植立柱建物跡 2 平面図



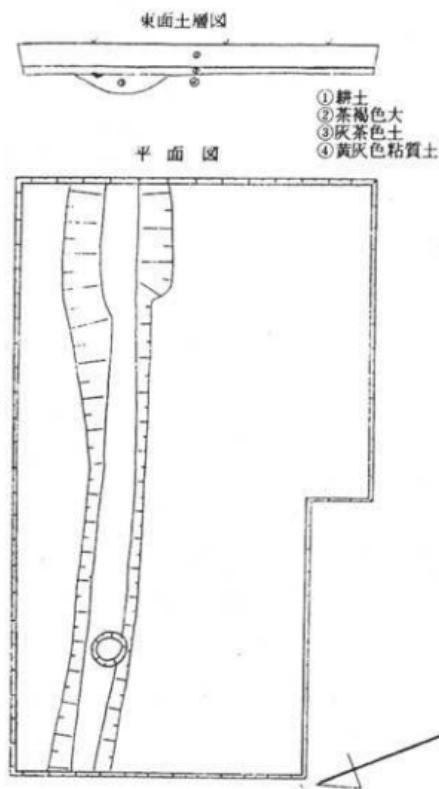
D

5.21

第4図 グリットAb 44 平面図及び土層図

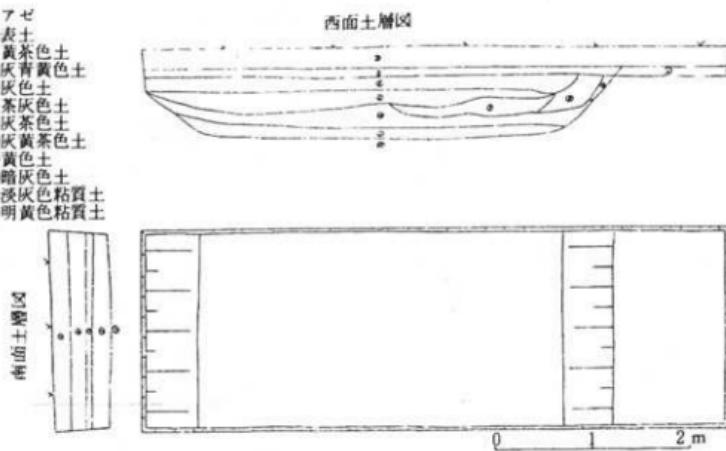


第5図 グリッドNo.45 平面図及び土層図



第6図 グリッドNo.56 平面図及び土層図

- (1)アゼ
- (2)表土
- (3)黄茶色土
- (4)灰青黃色土
- (5)灰色土
- (6)茶灰色土
- (7)灰茶色土
- (8)灰黃茶色土
- (9)黄色土
- (10)暗灰色土
- (11)淡灰色粘質土
- (12)明黄色粘質土



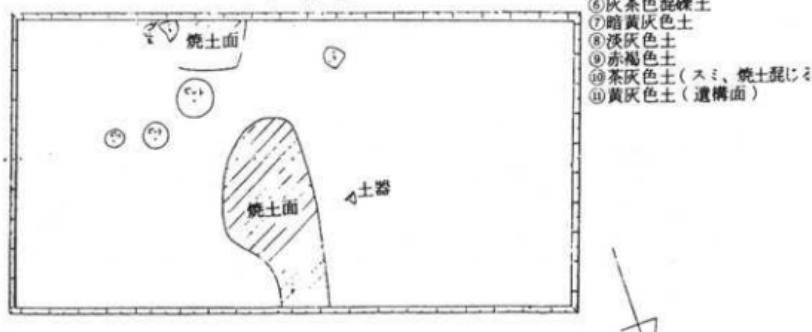
第7図 グリッドNo.50 平面図及び土層図

840111 S=1/20

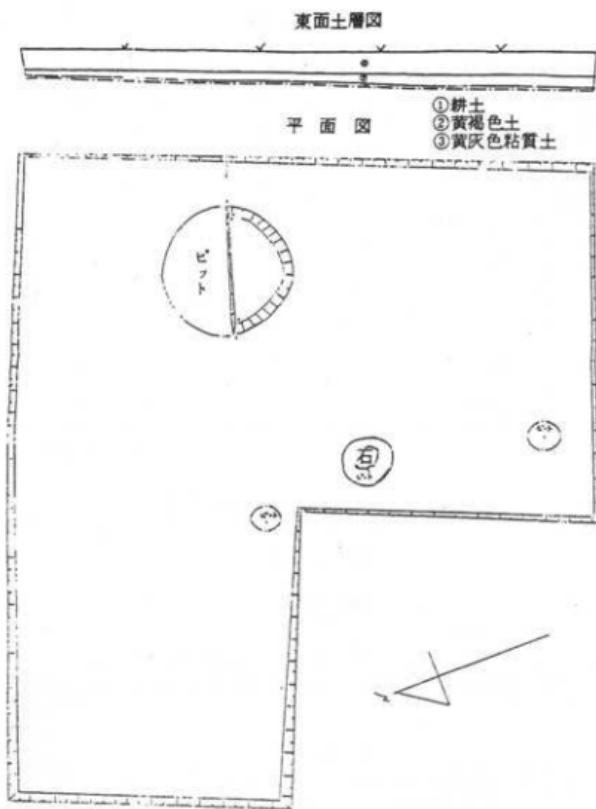
南面土層図

- (1)耕土
- (2)灰色土
- (3)黄茶色土
- (4)淡黄茶色土
- (5)灰黄色土
- (6)灰茶色混疊土
- (7)暗灰黄色土
- (8)淡灰色土
- (9)赤褐色土
- (10)茶灰色土(スミ、焼土混じる)
- (11)黄灰色土(遺構面)

平面図



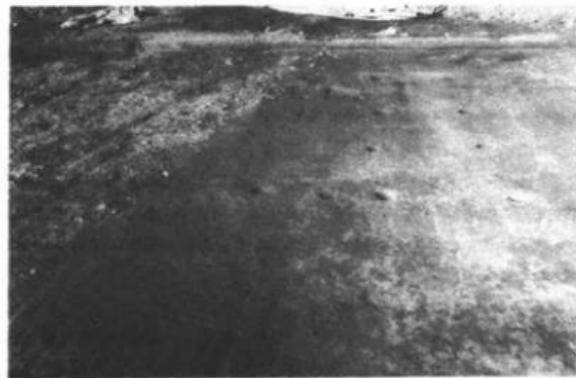
第8図 グリッドNo.51 平面図及び土層図



図版一遺構



掘立柱建物跡 1（北側より）



掘立柱建物跡 2（南側より）

19 久留美下川原遺跡確認調査

1. 所在地 三木市久留美字下川原他

2. 調査員 三木市教育委員会
松村正和

3. 期間 昭和58年10月31日～
昭和58年12月28日

4. 調査に至る経過

久留美下川原地区において、は場整備事業が実施されることになり、分布調査をおこなった結果、遺物の散布が見られた。そのため、事業予定地内の確認調査を実施することになった。

5. 調査の概要

調査は対象地域内の美の川沿い地区に6箇所、北側背後の段丘上に13箇所の計19箇所で、 $2 \times 2\text{m}$ のグリッドを設定し、実施した。

美の川沿い地区に設定した各グリッドは、砂層、砂礫層の堆積が見られ、遺構面となりえる層はなかった。また、遺物もほとんど皆無であった。

背後の段丘に設定したグリッドNo.1・5・6・13・14・16において遺物包含層を確認した。このうちNo.5・6・13でピットも確認した。

これらのグリッド設定場所は計画上切り土となっているため、耕地課、県教委と協議した結果、設計変更が不可能であるため、トレンチ掘りによる包含層の確認と、全面調査による遺構の確認をおこなうことになった。

〔トレンチ調査〕

包含層を確認したグリッドNo.1・14・16の設定場所で、西側山裾から東へ30mのトレンチを設定しておこなった。包含層は、西山裾から東端で検出した旧河道に向って傾斜し、旧河道へ流入していた。出土遺物は、完形品を含むものの量的には少なかった。また、遺構は検出されなかった。

〔全面調査〕

包含層及びピットを確認したグリッドNo.5・13を含めた切り土部分約350m²を全面発掘した。その結果、1辺7mと6mの方形の住居址と、巾約3m、深さ約1mの溝、そして多數のピットを検出した。出土遺物は、住居址埋土中より土師器壺、甕片と須恵器杯片が出土し、溝埋土中からは完形の土師器壺が出土した。包含層からも土師器、須恵器の破片が多數出土している。



第1図 調査位置図

6. まとめ

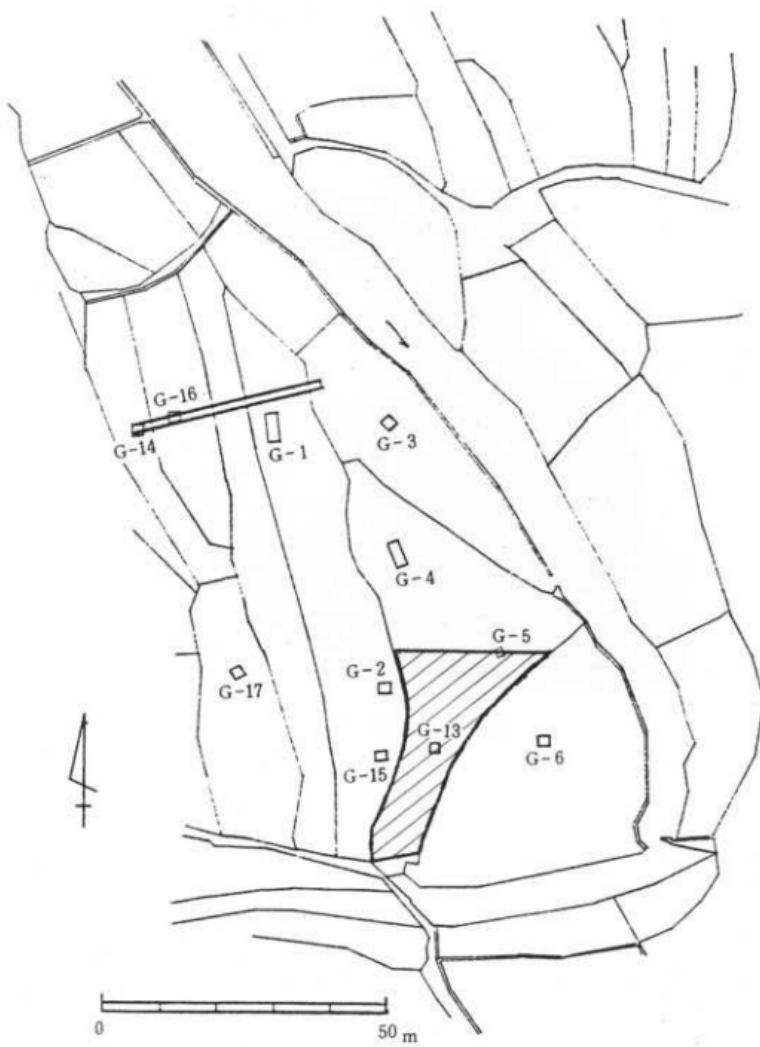
包含層を確認したグリッドNo.6の設定場所は、切り土計画になっているが、包含層までの切り下げがないため、残されることになった。

全面調査区で検出した住居址や溝の時期は遺物から古墳時代（6世紀頃）と考えている。

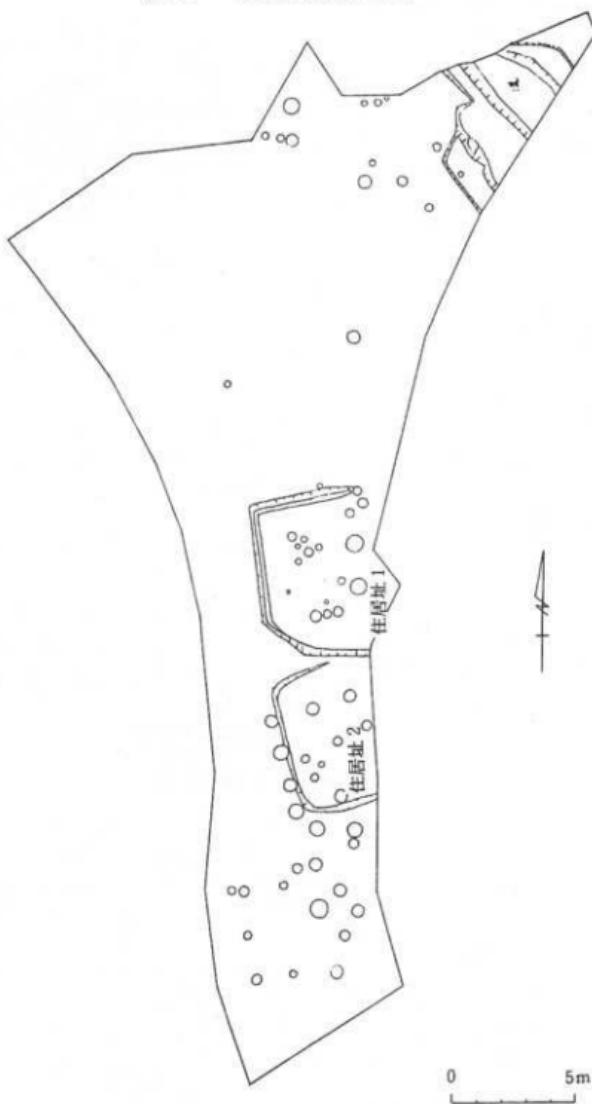


第2図　溝内出土壺

第3図 グリッド設定図



第4図 全面調査区遺構平面図



20 市道線が丘幹線道路整備事業・
高男寺川河川改良工事に伴なう
確認調査

1. 所在地 三木市志染町高男寺・窟屋

2. 調査員 三木市教育委員会
毛利哲夫・松村正和

3. 期 間 昭和59年1月26日～
昭和59年2月29日

4. 調査に至る経過

58年12月に、三木市土木課より

市道線が丘幹線道路新設工事及び、高男寺川改良工事を実施するにあたり、埋蔵文化財の有無について問合せがあった。この工事予定地は、県営は場整備事業計画の範囲内にあり、分布調査は実施済で遺物の散布を認めている。また、工事予定地内の高男寺地区において、「十善寺」の字名が残っているため確認調査を実施した。

5. 調査の概要

道路予定地内に17箇所、河川予定地内に12箇所の2×2mのグリッドを設定して調査をおこなった。

道路予定地内に設定したグリッドのうちNo.15で、床土直下よりビットを検出したため拡張したところ、ビットと溝1条を検出した。ビットは計5個となった。溝の深さは約5cm程度と浅いため、水浸化されるおりに削られたものと考えられる。なお、6個のビットのうち

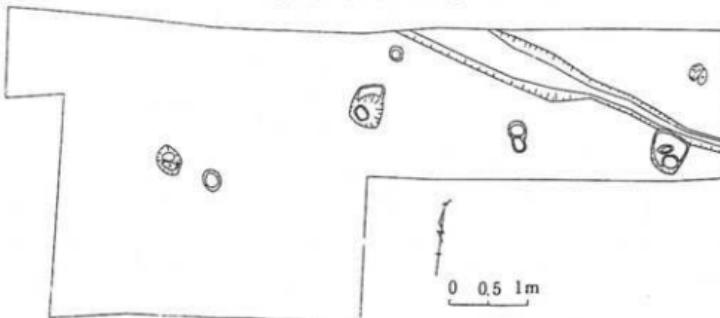


第1図 調査位置図

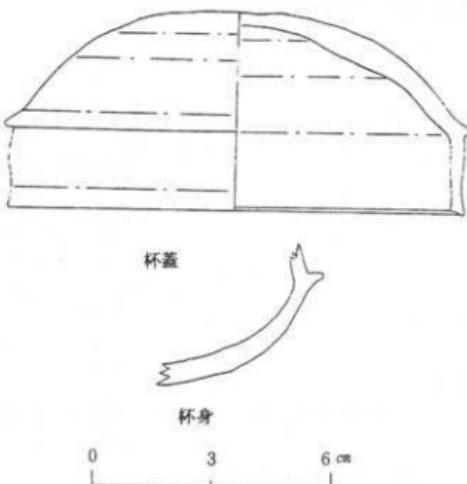
中央幹線道予定地内

グリッド No.15

遺構平面実測図



実測図



2個は方形の掘り方をもっていた。これらの遺構の時期は、溝埋土中より須恵器の杯蓋及び杯身が出土しており、古墳時代（6世紀頃）と考えている。

他のグリッドからは、遺物の出土があるものの、河川等の氾濫による堆積と考えられる砂層・砂疊層で遺構は検出できなかった。

河川改良工事予定地内で設定したグリッドでは、遺物の出土はあるものの遺構は検出できなかった。

21. 細目有田遺跡他確認調査

1. 所在地 三木市志染町細目字有田他

2. 調査員 三木市教育委員会
松村正和

3. 期間 昭和59年5月16日～
昭和59年7月19日～
昭和59年11月5日～
昭和60年3月29日

4. 調査に至る経過

昭和58年度より志染地区全域を対象として、県営は場整備事業が着手された。それに伴なって確認調査を実施することになり、今年度は、昨年度の継続地として、高男寺地区と細目・窟屋地区の一部を対象地域として、調査することになった。

5. 調査の概要

調査は主に2m×2mのグリッドで実施し、場合によってトレンチ調査とした。ピット等遺構を確認した時は、性格を知るために随時拡張した。グリッド数は、夏季施工区域と冬季施工区域、そして追加の60年度夏季施工区域を合わせて、128ヶ所を設定し調査を実施した。

1) 夏季施工区域

高男寺地区と細目地区とに、ある範囲で、グリッドは高男寺で15ヶ所(M1～15)、細目で13ヶ所(M16～28)、28ヶ所を設定し調査を実施した。

高男寺の調査地区では、グリッド1～15のすべてから、須恵器の細片が数片出土するものの、遺構を確認するには至らなかった。

細目の調査地区では、昨年度のは場整備事業で施工した第22号支線道路の延長である第22-2号支線道路予定地内に設定したグリッド17と、その南に設定したグリッド16において遺物包含層を確認し、さらにグリッド17で遺構と考えられるプランを検出した。検出したプランの性格を知るために拡張したところ、広がっていくと考えられるため、この第22-2号支線道路内を対象として拡張した。その結果、方形の堅穴式住居を2棟分確認した。西側より住居址1、住居址2とした。

住居址1は、1辺約7m、深さ0.6mの方形で巾約1mの屋内高床をもち、東辺で周壁溝を検出した。また、屋内床面において、床に貼っていたと考えられる黄茶色砂質土を確認した。

出土遺物のほとんどは破片であるが、実測できる遺物として、鉢と壺底部がある。

住居址2は、1辺約7m、深さ約0.5mの方形で巾約1.2mの屋内高床をもち、住居址1とはほぼ同じである。しかし、周壁溝、貼床は認められない。

出土遺物のほとんどは破片で、実測できるものとして鉢と壺がある。他に石製品として砾石が出土した。



第1図 調査位置図

その他のグリッドからは、何も遺構は検出されなかった。

2) 冬季施工区域

高男寺地区と窟屋地区とにわたる範囲で、グリッドは高男寺で32ヶ所(№1~32)、窟屋で26ヶ所(№33~58)の計58ヶ所を設定し調査を実施した。

高男寺の調査区では、グリッド1~32のほとんどから土器の細片が数片出土する程度で、遺構はなかった。

窟屋の調査区では、第54号支線排水路に設定したグリッド43において、東西に延びる溝を1条確認したが、溝内からの出土遺物はなく時期は不明。また、当グリッド南の調査区より、土師質土器が集中して出土したが、遺構の確認はない。グリッド43の溝との関連は不明。

なお、昨年度に緑が丘中央幹線道路計画に伴う確認調査で、古墳時代の遺構を確認しているため、その付近にグリッド46を設定し、広がりを調査したが遺構は確認できなかった。しかし、遺構面は統一している。

その他のグリッドにおいては、土器片の出土があるものの、遺構は確認されなかった。

3) 60年度分夏季施工区域(追加調査区)

冬季施工区域に続く工区で、高男寺地区と窟屋地区にわたる。グリッドは、窟屋で32ヶ所(№1~32)、高男寺で10ヶ所(№33~42)の計42ヶ所を設定。トレンチは、窟屋で1本を設定し調査をおこなった。

高男寺の10ヶ所の調査区では、耕土下数十cmで地山となり、遺構はなかった。

窟屋での調査区では、トレンチ1、グリッド3、グリッド8、グリッド20、グリッド27、29、グリッド32で遺構を確認した。

トレンチ1は、冬季施工区のグリッド43で溝を確認しているため、第54号支線排水路に平行するよう東側に設定した。トレンチの南側において、グリッド43から続く溝を、そして、北側からは古墳時代の溝を確認した。この溝は巾1.5m、深さ0.4mで東西に延びている。遺物は杯身の破片を含め多数溝内埋土より出土した。

グリッド3では、ピットを1ヶ確認したのに伴い、南北に延長したところ、北側へ延ばした調査区で浅い溝状の遺構を確認した。南側へ延ばした調査区で褐色系の土層を確認し遺物が多く含まれているのでさらに南へ延長した。その結果、巾9m、深さ0.6mの大溝を確認するに至った。出土する遺物は、須恵器ばかりで杯身片や壺片が多く出土した。遺物からこの大溝は、古墳時代の遺構と考えられる。

グリッド8は、トレンチ1で検出した南側の溝の続きを確認するため設定したもので、予想どおり続くことがわかった。

グリッド20は、耕土直下で遺構プランを検出した。この遺構の性格を知るべく延長拡幅したところ、1辺約7m~8mの方形プランをもつ住居址を確認した。住居址の深さは埋土を掘り込んでいないため不明だが、耕土直下で検出したことから、田を形成する際に相当削平していると考えられるため、残存の深さは十数cm程度だと思われる。時期も遺物の出土をみてないため明確でないが、古墳時代と考えている。

グリッド27、32からは、それぞれピットを5ヶと1ヶ確認した。

グリッド29でピットを確認したため、南側、北側、西側へそれぞれ拡幅したところ、溝1条とこれにはほぼ平行して並ぶ柱穴を検出した。柱穴は径15cm~20cmで、約1.5mの間隔で南北に2間分を確認した。他に不明ピット2ヶも検出している。1条の溝は、巾約1mに深さ約0.4mを計り、延長は不明だが南北に続くと考えている。当遺構の時期は溝埋土中より出土した遺物から奈良時代と思われる。

なお、前述したグリッド27、32の遺構の時期については、出土遺物が少量で時期を確定する遺物がないが、グリッド27、32の堆積土層とグリッド29の堆積土層がほとんど同様であることから、グリッド29の遺構時期と同じと考えられる。

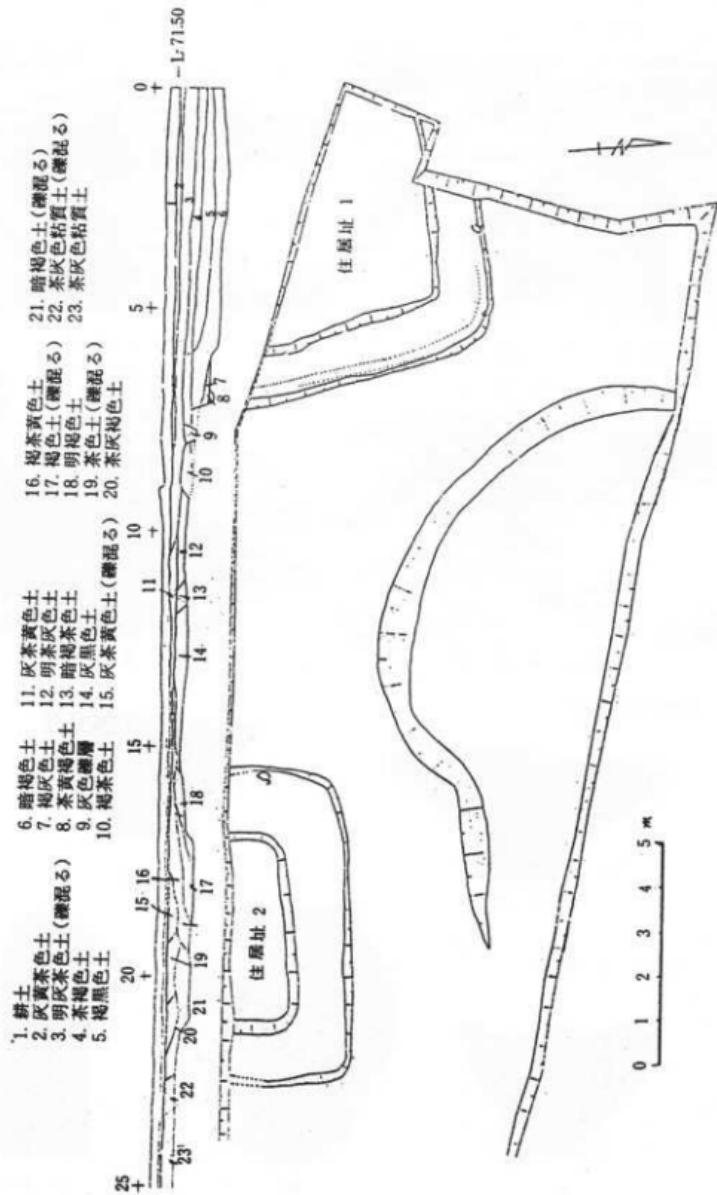
6. ま と め

高男寺地区は、高男寺庵寺に関する坊が百以上あったと、縁起に伝えられているが、何ら庵寺に関する遺構は確認できなかった。おそらく、寺庵絶後に田畠として開墾されたことにより、遺構は削平を受けたものと考えられる。

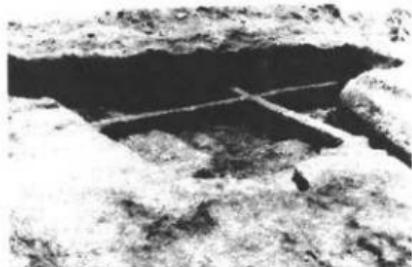
細目地区の字有田で確認した住居址は、出土遺物から弥生時代末～古墳時代の時期と考えている。当遺構は前述したとおり第22-2号支線道路予定地内にあり、切り下げられる計画であったが、協議の結果、設計変更により埋戻し保存となった。

窟屋地区のグリッド43で確認した溝については、排水路予定地のため、この部分については分断されてしまうが、排水路予定の部分以外は残る。また、追加でおこなった窟屋の調査区では、前述したとおり遺構を確認しているため、事業設計計画において保存されることとなった。

第2図 住居址遺構平面図及び土層図



図版一　遺構・遺物



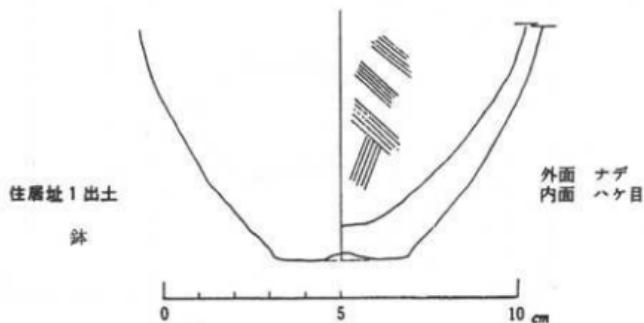
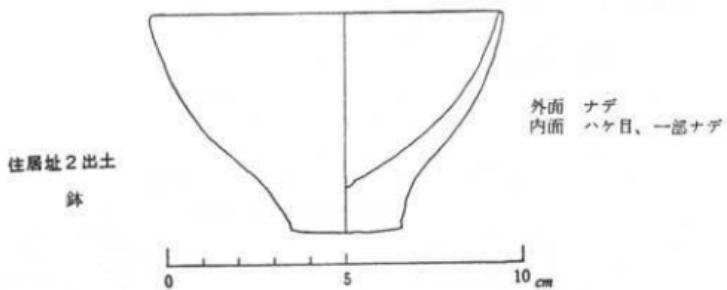
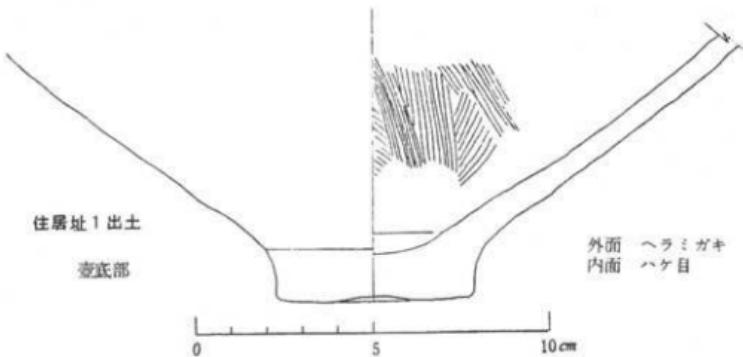
住居址1出土遺物



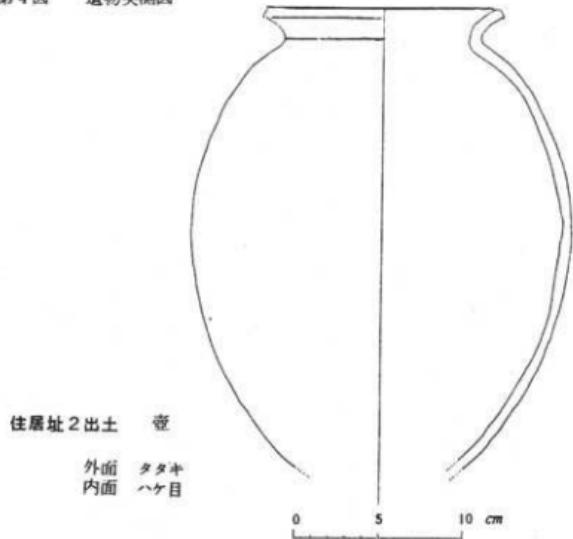
住居址2出土遺物



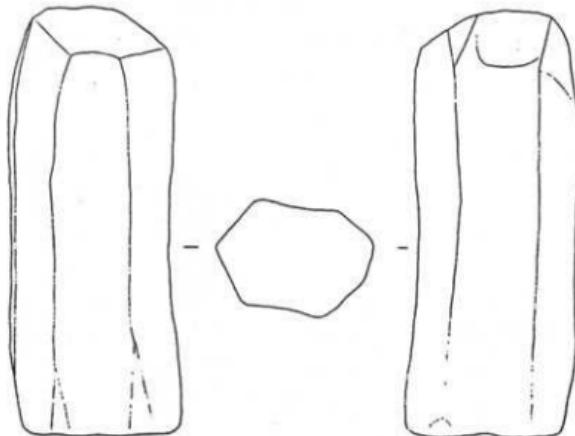
第3図 遺物実測図



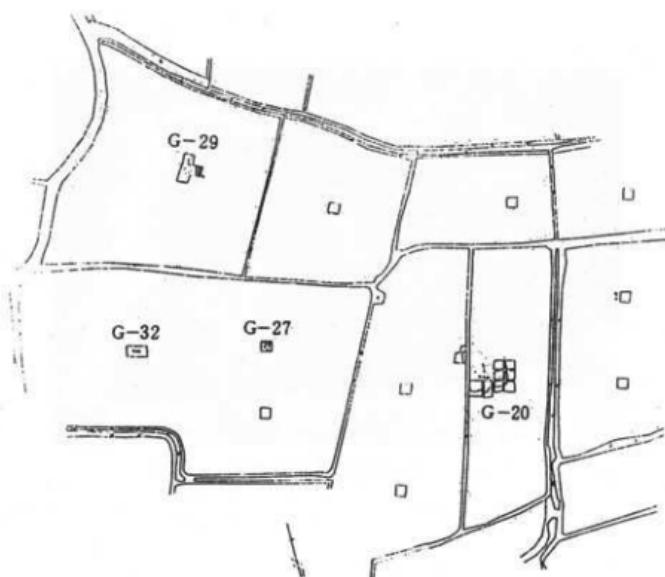
第4図 遺物実測図



0 5 10 cm



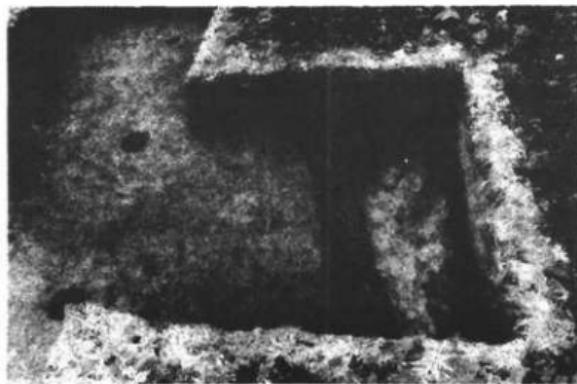
第5図 窯屋調査区平面図



図版二 遺構



トレンチ1（南側より）



G-29（北側より、溝）

22 跡部古窯3号窯発掘調査

1. 所在地 三木市跡部字三ヶ釜 291-4 他

2. 調査員 三木市教育委員会

毛利哲夫・松村正和

3. 期間 昭和59年10月1日

昭和59年10月26日

4. 調査に至る経過

三木市与呂木にある市埋立処分地が満

杯状態のため、三木市加佐にある市清掃

センター東に向いの跡部地番の谷を埋立処分地として新設工事が進められており、廃棄物搬入車両の進入路として、市道加佐草加野線を改修し処分地に取り付ける計画がなされた。そのため計画地内の埋蔵文化財分布調査を実施したところ、一部露出した窯を確認した。この結果をもとに、環境課、県教委と取り扱いについて協議を重ねたが、道路計画上現状保存は不可能なため、発掘調査による記録保存の処置をとることになった。

なお、発掘調査にあたり、同じ跡部に存在する窯との関係から、当窯を跡部古窯3号窯と呼ぶことにした。

5. 調査の概要

当窯は、埋立処分地工事前に実施した分布調査で確認出来なかつたもので、工事によって露出し、今回の分布調査で確認するに及んだものである。

窯本体は、工事によって前庭部と燃焼部付近を失なってはいるが、残存長約13mを測る登り窯である。

側壁の右前部は崩れではいるが、左右とも遺存状況は良い方である。また床面も、前部の一部は失なわれているが全面に遺存し、一部で補修されているのが確認できた。

遺物については、床面で須恵器の甕片を数片検出したのみである。他には、焼台も検出しきた。灰原については、埋立処分地内に布設された廃棄物搬入車両専用道路敷の下となっており、調査は不可能であった。

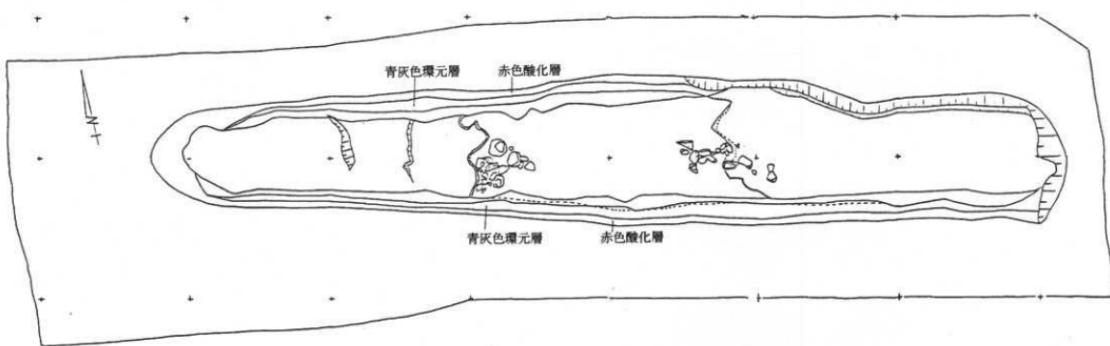
なお、埋立処分地内の南西隅には、露出した2号窯が存在している。



第1図 調査位置図



第2図 完 挖 後



第3圖 跡部3号窩平面実測図

23 巴古墳群第1号墳発掘調査

(旧名称、土山街道群集墳第1群第5墳)

1. 所在地 三木市別所町巴7番地

2. 調査員 三木市教育委員会
毛利哲夫・松村正和

3. 期間 昭和59年11月5日～
昭和60年2月4日



第1図 調査位置図

4. 調査に至る経過

昭和47年より開発された三木工場公園は、現在38社が操業しており、面積は64.7haの広さをもつ工場専用地である。

オークラ輸送機株式会社が県土地開発公社よりこの一角を購入し工場建設を計画したが、その予定地に古墳が存在しているため、その取り扱いについて問い合わせがあった。県教育委員会埋蔵文化財調査事務所、オークラ輸送機株式会社及び三木市教育委員会の三者で度数にわたり協議を重ね、調査完了後に現状保存するか記録保存にするかを決定することで発掘調査を実施することになった。

5. 調査前の状況

巴古墳群は、7基の古墳から成りたっており、今回の調査の1号墳及び2・3号墳は工場公園内に位置し、4～7号墳は1号墳北側山林内に存在する。

1号墳の周囲は整地されており、当初墳丘の低い円墳と考えられたが、裾部でトレンチを入れた結果、整地をするとときにかなりの盛土をしていることがわかり、その高さ約1.3mを測る。地元の人の話では、周囲が池でその中に古墳があったとのことである。また、雑木伐採をするまではほぼ完全な形と思われていたが、墳丘の東部分約3分の1が土取りで破壊されていた。

6. 墳丘

墳丘は裾部で標高約7.3m、墳頂部で約7.6mを測る。

当初円墳と思われていたが、整地時の盛土を除去したところ墳丘裾部でテラス状の段を有する方墳であることがわかった。墳丘東部分は土取りで破壊されていたが、テラス状の遺構はかろうじて確認された。各面はほぼ東西南北になっており、南北辺約1.6m、東西辺約1.7mを測る。なお、東西墳丘残存部は約1.1mである。

墳丘の封土は版築が施されており、各種の土が交互に積み上げられている。

7. 埋葬施設

主体部はほぼ墳丘中央部に位置し、東西方向に収められている。竪穴式割竹木棺直葬であり、残存部分は長さ3.7m、幅0.9mを測る。土取りで破壊されているため全体の大きさは不明である。主体部内底部には朱が一面残っており、木棺に朱が全面塗られていたと思われる。

埋葬施設の掘り方は東西方向に4.8m、南北方向に2.8mを測り、墳丘版築後にこの部分を掘り込んでいる。棺はやや中心部より北側に寄っている。

8. 遺物

棺内における出土遺物は、鉄器4片だけである。棺西側より約1mのところでかたまって出土した。

① 鉄剣 長さ50cm、最大幅2.5cmを測る。先より20cmのところでくの字状に曲がっており、曲がった刀を埋葬することについては不明である。なお、この鉄剣はもうひとつの鉄剣と直交するような形で出土している。茎部分に木質及び糸状の巻き痕が残る。

② 鉄剣 長さ32cm、幅3cmを測る。

③ 刀子 長さ18cm、幅2cmを測る。

④ 鉄斧 残存部長さ7cm、幅4.5cm、最大厚さ2.5cmを測る。

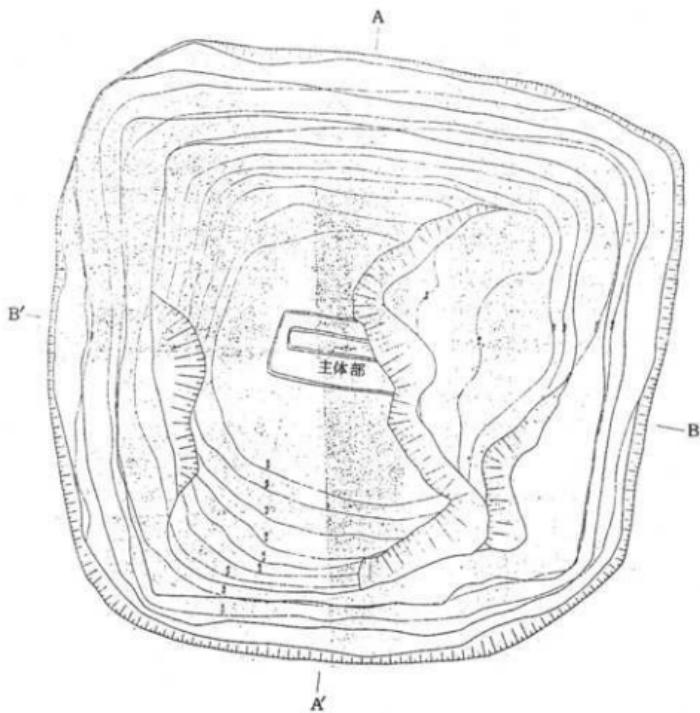
棺内遺物は以上で、土器類は出土していない。棺外遺物として、不明鉄器1片と、北側棺部で須恵器の細片を採取したが、器種については不明である。

9. まとめ

巴第1号墳は、池や整地のためにかなり周囲の状況が変わっており、旧地形は全くわからない状況にある。

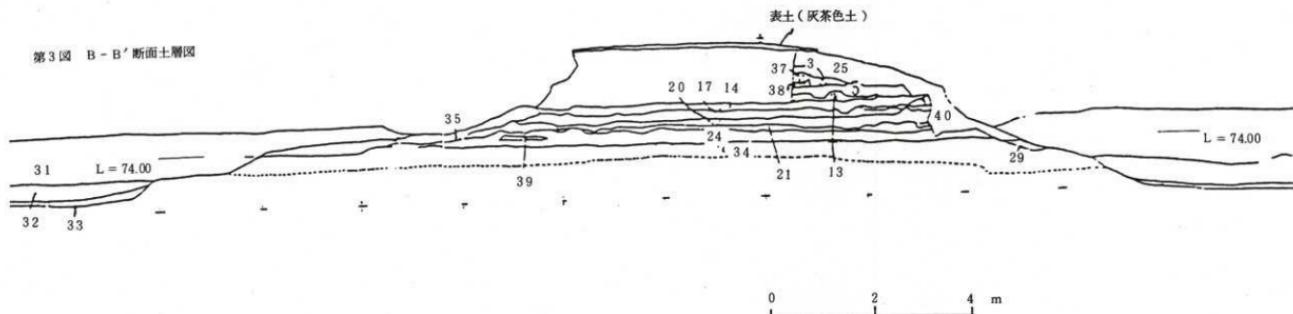
墳丘は、裾部でテラス状の段をもつ方墳である。墳丘東部がかなり土取りで破壊されたのは残念である。埋葬施設は墳丘中央部で、竪穴式の割竹木棺直葬である。時期的には棺の大きさ等から推定すると5C中頃と思われる。

また、周濠の有無について、裾部より東西にトレッチを入れたが、その存在は確認できなかった。整地される前、古墳の周囲は池であったことより、池を造るときに、周濠部分も破壊されたかも知れない。

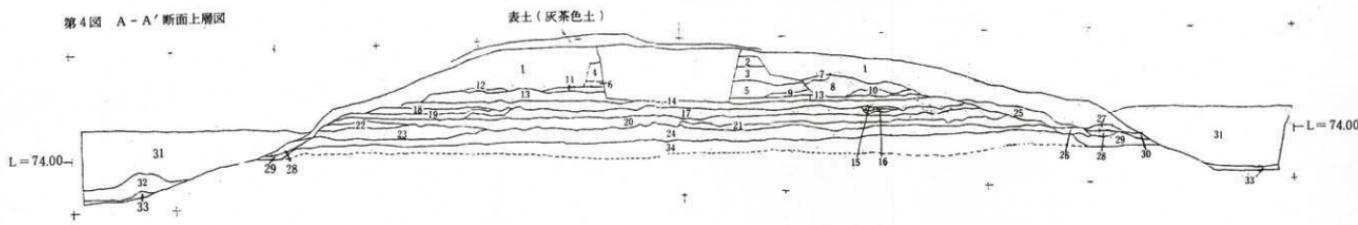


第2図 平面図

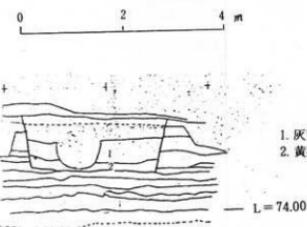
第3図 B - B' 断面土層図



第4図 A - A' 断面上層図

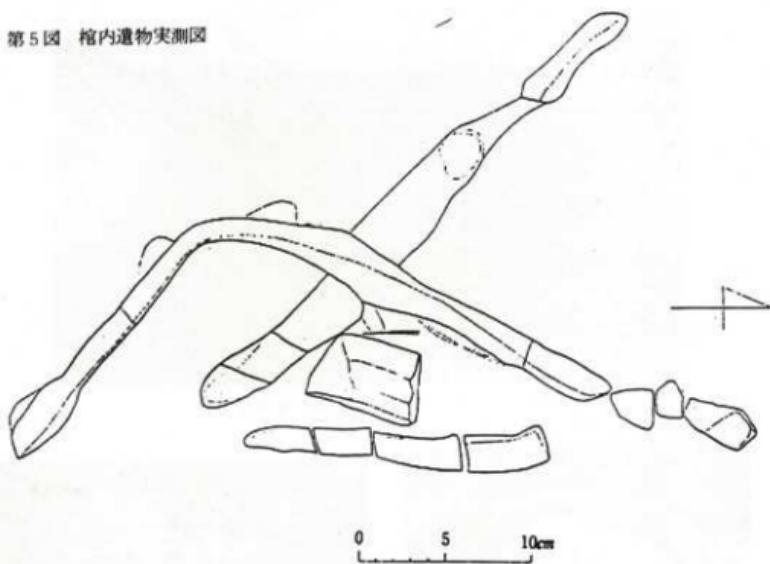


- | | | | |
|------------|--------------|------------------|-----------------|
| 1. 黄茶色砂質土 | 11. 暗茶灰色砂質土 | 21. 灰黄色砂質土 | 31. 明茶色礫混土(整地層) |
| 2. 淡黄茶色砂質土 | 12. 黄灰茶色砂質土 | 22. 暗灰黄茶色土 | 32. 黄灰青色粘質土 |
| 3. 黄茶灰色砂質土 | 13. 暗灰褐色砂質土 | 23. 明灰黄茶色砂質土 | 33. 暗灰色泥土 |
| 4. 明灰茶色砂質土 | 14. 茶灰色砂質土 | 24. 暗灰茶色砂質土(小礫混) | 34. 茶灰褐色粘質土(山地) |
| 5. 灰茶色砂質土 | 15. 暗灰黄色砂質土 | 25. 黄灰色砂質土 | 35. 茶灰黄色砂質土 |
| 6. 明黄茶色砂質土 | 16. 明黄灰色土 | 26. 明灰茶色砂質土 | 36. 灰茶黄色砂質土 |
| 7. 灰黄茶色砂質土 | 17. 茶灰褐色砂質土 | 27. 暗黄灰茶色砂質土 | 37. 褐灰色砂質土 |
| 8. 暗黄茶色砂質土 | 18. 暗茶灰褐色砂質土 | 28. 黑灰色砂質土 | 38. 黄灰褐色砂質土 |
| 9. 灰褐色砂質土 | 19. 明黄灰褐色砂質土 | 29. 灰黑色砂質土 | 39. 灰色砂質土 |
| 10. 灰褐色粘質土 | 20. 明茶灰色砂質土 | 30. 淡黄灰色砂質土 | 40. 淡黄灰色砂質土 |

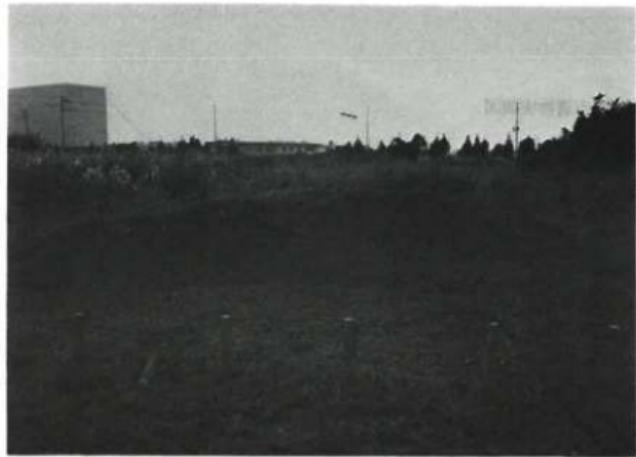


1. 灰黄茶色粘質土(小礫混る)
2. 黄茶色粘質土

第5図 棺内遺物実測図



図版1 巴第1号墳調査前(南より)



図版 2 巴第 1 号墳樹木伐採後（東より）



図版 3 巴第 1 号墳全景（真上より）



図版 4 巴第 1 号墳近景（東より）



図版 6 主体部内遺物出土状況



図版 5 主体部（真上より）

三木市埋蔵文化財調査概報

編集・発行 昭和61年3月31日発行
三木市教育委員会
兵庫県三木市上の丸町4番5号
TEL (07948) 2-2000(代)

印 刷 小野高速印刷株式会社
姫路市平野町62番地
